

林業情報誌「石川の林業」

この人に聞く シリーズ

2013年5月号～2022年2月号



石川県山林協会

目 次

第1章 林業事業体・林業振興

- ・ 次代を担う若き林業従事者 ----- 1
 (有)南加賀造林 リーダー 小藤 太郎
- ・ 地道でたゆまぬ努力 ----- 2
 中能登森林組合 代表理事組合長 宮本 惣一郎
- ・ (株)中野の山づくりへの取組 ----- 3
 (株)中野 取締役兼木材事業部長 吉村 兆
 〃 林業経営アドバイザー 浦谷 國夫
- ・ 父子鷹 一段取りで決まる素材生産 ----- 4
 中野林業 中野 敏一、中野 康隆
- ・ 集落の山、全部間伐します！ ----- 5
 八田間伐事業会 代表 大松 勲
- ・ 「日本伐木チャンピオンシップ」県代表 ----- 6
 金沢森林組合 加藤 一樹
- ・ 過疎山村地で苗木の生産に励む ----- 7
 石川県山林種苗協同組合 副理事長 金田 喜一
- ・ 林業の循環を支える苗木生産を担う ----- 8
 (有)南加賀造林 坂下 修造

第2章 特用林産・里山資源

- ・ 建設業から異業種参入で原木しいたけ栽培を開始 ----- 9
 北興建設(株) 井戸谷 信男、滝上 雅義
- ・ 二代目 ～原木生産にこだわり孤軍奮闘～ -----10
 渡津農林会 代表 水上 智紀
- ・ 山に目を向けてもらう取組 ～薬木・薬草類の採取販売～ -----11
 (株)白峰産業 取締役専務 尾田 弘好
- ・ 能登の里山で製炭業に生きる大野長一郎 -----12
 珠洲市 大野 長一郎
- ・ 東山町たけのこの里を守る -----13
 J A小松市たけのこ部会 副部会長 吉田 達
- ・ 宝達葛の伝承 -----14
 宝達葛生産友の会 代表 佐藤 勝治

(注) 役職名は掲載当時のものを使用 (以下同様)

- ・ 祖父母の出造り時代から受け継ぐわさび生産 -----15
白山麓わさび振興会 役員 橋本 和則
- ・ 石川をお茶炭の産地に -----16
能美市 安田 宏三
- ・ 白峰の伝統を守る菓子作り -----17
(有)志んさ 代表取締役 織田 毅
- ・ オール輪島の輪島塗を目指すうるし掻き職人 -----18
輪島市【うるし掻き職人】 長平 勇
- ・ ウルシの実を活用した和ろうそく作り -----19
高澤ろうそく店 代表取締役 高澤 久

第3章 木材利用

- ・ 薪ストーブ、使ってみませんか？ -----20
(株)通商燃料 兄後 智明、石谷 光男
- ・ 「田鶴浜建具」の伝統継承とこれから -----21
七尾市 岡野 繁
- ・ 木のぬくもりが伝わる手づくりの白山笠 -----22
石川県伝統工芸士(檜細工) 河岸 すみゑ
- ・ 木彫りでつくる加賀獅子頭 -----23
知田工房 知田 善博
- ・ 「木」の魅力で人と人を繋げる -----24
(株)シモアラ 副社長 下荒 朋子
- ・ 能登ヒバの魅力で木材産業を活性化 -----25
鳳至木材(株) 取締役 四住 一也
- ・ 100年以上続く伝統工法で木の魅力を伝える職人集団 -----26
(株)沢野建設工房 代表取締役 澤野 利春
- ・ 木は長く気も長く100年以上続く2年熟成醤油 -----27
近岡屋醤油(株) 代表取締役 近岡 志緒美
- ・ 風土や文化に根づいた音を奏でるギターづくり -----28
近撥弦楽器 店主 近 信濃
- ・ 薪で焼いたピッツアとこだわり雑貨の店 -----29
もく遊りん 福江 翔太

第4章 森林利用・森づくり活動

- ・ 建具の町の里山整備 -----30
まちなかり山公園づくりの会 代表 山元 広隆
- ・ 森林公園に新たな魅力を -----31
森林セラピスト 坂本 美津子
- ・ 林業応援団を増やしたい！ -----32
もりラバー林業女子会@石川 代表 砂山 亜紀子
- ・ 健やかな松林を次世代の子どもたちに -----33
いしかわ「能美の松原」サポートクラブ
- ・ 千里浜海岸を守る地域住民によるクロマツ林再生活動について -----34
千里浜地区まちづくり協議会 会長 越野 兵司
- ・ 鞍掛山と共に歩む賑わいづくり -----35
滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長 山下 豊
- ・ 森林公園の魅力を伝える森の案内人 -----36
石川県森林公園インフォメーションセンター長 内藤 善太

第5章 地域振興・山村振興

- ・ 地域エネルギー資源の活用を目指して -----37
白山しらみね薪の会 理事兼事務局長 風 一
- ・ 能登町「当目夢を語る会」の取り組み -----38
当目夢を語る会 会長 向峠 智隆
- ・ 小松市の基本構想は3活 -----39
小松市環境共生部 担当部長兼農林水産課長 山本 哲也
- ・ 地域住民の感謝を励みにイノシシの捕獲活動を行う -----40
輪島市【イノシシの捕獲名人】 浦 啓一
- ・ 山芋掘り35年のベテラン！ -----41
能登町(旧柳田村)【山芋掘り名人】 大井 茂
- ・ キノコ採り名人 -----42
能登町【キノコ採り名人】 笹谷内 秀雄
- ・ ミツバチと共に50年 -----43
石川県養蜂組合 相談役 下橋 芳夫

この人に聞く

次代を担う若き林業従事者

有限会社南加賀造林 リーダ 小藤 太郎さん



有限会社南加賀造林で若手リーダーとして活躍する小藤太郎さん

藤太郎（30歳）さんをご紹介します。南加賀造林は平成11年に設立され、現在は従業員9名（30代4名、50代2名、60代3名）で業務を行っています。主な仕事は、かが森林組合からの森林整備事業を請負い、高性能林業機械の保有はグラップル1台ですが、レンタルによるフォワーダ、トラック等で必要な機械を調達しています。

氏は17歳の時に、友人の父親の勧めで南加賀造林に就職し、下刈、枝打、除間伐等の作業に従事しました。その当時は林業への関心も薄く、独身で着の身着的ままで働いていたこともあり、このまま仕事を続けていくかどうか迷いながら働いていました。最初の転職となったのは、結婚と娘の誕生であります。一家の主としてしっかりと腰を落ち着け、現場作業を確実にや

つてきました。この間、国の林業施策は森林資源の充実等から搬出間伐等の木材利用へと事業が転換されたことも手伝って、会社や自分自身も利用間伐部門の仕事にシフトし、さらに間伐材の生産性を高めるため、平成23年度にはグラップル1台を追加し、高性能林業機械オペレーターを含め、会社業務の中心的な役割を担うようになりました。

次の転職は搬出間伐へのシフトに合わせ、この4～5年の間に採用された30代の若手社員9名の育成であります。従業員9名のうち氏を含めて30代の若手が4名いるものの、仕事経験が浅く、氏のリーダーとしての責務が大きくなっていることでもあります。

このため、地主等とのトラブルや現場作業で事故が起きないように、これまでの自身の仕事上のミスや労災に係る事故報告等の事例を題材にし、若手従業員の教育指導に当たっています。

また、氏は人が財産であり、従業員の全てが生活できるような生活が義務があると思つて

います。高性能林業機械を活用しながらの仕事は魅力を感じる一方、従来システムより何倍も仕事をこなす高性能林業機械はこれまでより人手を必要としないうことから、従業員の仕事配分と作業部門の配置が重要と考えられています。例えば、1台の機械を1人の専用車両とせず若手社員が全員、操作できるようにマルチの人間を育成していきたいと考えています。

社長からは、会社経営の中心人物として期待されており、今後、責任ある立場として林業・木材の専門的知識や会社経営の勉強も含め、さまざまな分野の人からの教えを学んでいきたいと意気込みをのぞかせています。氏の当面の目標は、今年度のグラップル、フォワーダの導入であり、森林の持主が思い通りにしたいとの強い思いを抱いています。

今後の氏と若手林業従事者皆様のご活躍を期待しています。

（南加賀農林総合事務所森林部）

この人に聞く

地道でたゆまぬ努力



中能登森林組合 代表理事組合長 宮本惣一郎 さん

中能登森林組合の代表理事組合長に就任された、宮本惣一郎さん

宅にお伺いしました。氏は元県議会議員として森林環境税の創設に寄与されるとともに、カキ養殖やサカキ（真榊）栽培を行うなどバイタリティにあふれた方です。

新組合長としての抱負は
中能登森林組合は合併から4年経過しましたが依然として経営状況が厳しく、職員を雇用していくのが精いっぱい状況です。農協などと違って金融や保険などの信用事業が無いので、経済活動力が弱い財務体質になっています。

しかし、森林組合は組合員のために存在しており、組合員の生活の一助になることが一番の目的です。職員の一一人が経

営感覚を持ち民間会社と同じような認識を持っていくべきだと思います。

このため、かねてから検討されてきた組織の改編を今年9月に実施し効率的な運営方法に改めます。

ご自身の森林への関わりは
生まれ育った七尾市中島町小牧は天然の入り江となっていて、古くは木材運搬（現在はカキ養殖）に適した所です。往時は植林が盛んで、祖父から梅雨の頃にはアテの直挿しをさせられたものです。

祖父の口癖は「漁師は1日、百姓は1年、山持ちは50年」と、米や野菜と違って立木から収入を得るためには、長い年月とたゆまぬ努力が必要だと教え込まれました。

その教えが講じたのでしょいか、20年前から試行錯誤で始めたサカキ栽培が軌道に乗ってきました。

サカキ（真榊）栽培を見せてもらいました

山に自生するヒサカキを採取している方はおいでですが、サカキ（真榊）を植え、穂木を採り商売にしているのは県内では自分一人だけだと思います。

植栽場所や日当たり、病害虫などの問題を克服し、最近になってようやく評価を得られるようになりました。

現在はスギ林の中に約5、000本を植えて管理しています。間伐跡地の木漏れ口があるところが一番いいんですよ。採取や出荷はアルバイト2名を雇って対応していますから、地元の雇用も生まれたので「能登の葉っぱビジネス」ですね。

お宅へ訪問してのインタビューでしたが、ご自宅の庭や周辺の山にはいたるところにサカキが植えられていました。今年も間伐跡地に1、000本の苗木

を植栽するそうです。

山の整備とその林内を利用するサカキ生産から、地道でたゆまぬ努力の持ち主の方だと思います。中能登森林組合の経営トップとしても今後の手腕に大いに期待しています。

（中能登農林総合事務所森林部）



スギ林のサカキ栽培

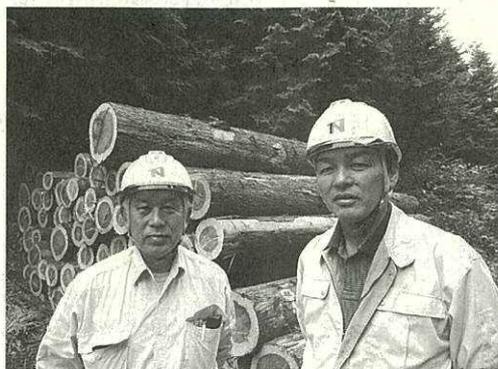


出荷するサカキ

この人に聞く

(株)中野のEびんへの取組

取締役兼木材事業部長 吉村 兆 さん・林業経営アドバイザー 浦谷 國夫 さん



浦谷國夫(左)さんと吉村兆(右)さん

(株)中野は昨年10月に穴水町と七尾市にまたがる約740haの山林において、森林経営計画(属地)の認定を受けました。同社の取締役兼木材事業部長の吉村兆さん、同社社員で林業経営アドバイザーの浦谷國夫さんにお話を伺いました。

森林経営計画を立てることになったいきさつを教えてください。当社は志賀町高浜町に本社を構え、建築資材・住宅設備など住宅関係全般を取り扱う会社ですが、林業専用グラブブルクル

ーン付きトラックと連結型フルトレーラーを購入し、平成18年から原木の運搬も始めており、山土場での原木購入・直送も行っていきます。

以前から素材生産にも取り組みたいと考えていましたが、平成23年に初めて北越紀州製紙(株)の材を山土場買いました。とがきっかけで、森林経営計画を進めることとなりました。北越紀州製紙(株)は能登地域に約1,000haの社有林を所有しており、このうち約840haが穴水町内にあります。森林施策計画制度から森林経営計画制度に移行することから森林経営計画の策定を勧めました。それなら(株)中野に任せたいと委託されました。それからすぐに北越紀州製紙(株)の穴水町社有林を中心とした計画作成に着手し、県森林管理課の指導のもと、一年がかりで認定までこぎ付けました。

現在の素材生産の状況は。

今年度は補助事業を活用してハーベスタとフォワーダを導入し、20haを目標に間伐を進めています。8月上旬までに5haの間伐を終え、約260mの間伐材を搬出しました。材は自社用のほかに、林ベニヤ産業(株)七尾工場、(協)能登木材総合センター、(株)輪島チップセンターなどに出材しています。来年度は間伐目標面積を80haとしています。

今後の展望を教えてください。

今年度は初年度のためいろいろ試行錯誤の中で行っています。が、真つ直ぐで節の少ない良材は木材市場や製材工場行き、やや曲がり・節等のある材は合板工場、それ以外の材はチップ用といったふうに、少しでも高く売れるよう山土場で細かく仕分けを行い、そこから販売先へ直送し、できるだけ運搬コストを抑えることを徹底しました。

森林が分散せずまとまっております。トラックが通れる道も近い

という立地条件の良さもあり、

間伐5haで補助事業を活用して約130万円、木材1m当たり約5,000円を所有者に還元することができました。今後は販売先の納材規格に対応した木材の仕分け技術の向上や新規販売先の開拓などを進め、所有者に1円でも多く還元できる体制を整えていきたいと思っています。また、団地周辺の森林所有者へ働きかけ、森林経営計画の対象面積の拡大を図るとともに、間伐材などの素材生産から運搬製材品、住宅建築までの一貫した取り組みをさらに進めていきたいと考えています。能登地域の新たな林業の担い手として、県産材のさらなる利用推進に貢献できるようにすれば幸いです。

北越紀州製紙(株)は全国に社有林を所有していますが、民間事業体に森林経営計画を任せられているのは(株)中野だけです。民間ならではの機動力で山づくりに取り組み始めた同社の今後の活躍に期待しています。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

父子鷹 一段取りで決まる素材生産

中野林業 中野敏一さん、中野康隆さん



(父) 敏一さん：左 (子) 康隆さん：右

今回は、南加賀地域で精力的に素材生産を営む、中野林業さんにお話を伺いました。

会社の設立は？

父の敏一さんは、平成3年までは林業とは全く関係のない仕事に従事していましたが、ご縁があり、平成4年より育林作業に従事することとなりました。その後、平成8年には中野造林を設立し、平成21年に中野林業と改名をいたしております。

独立してからは、当時の森林組合長のすすめもあり、グラッ

ブル2台を借り受け、育林作業から素材生産へと仕事をシフトしました。その後は順次、フォワード、グラッブル、プロセッサを導入し、着実に機械化を進めていきました。

子の康隆さんは、平成10年に高校を卒業した後、父の仕事に従事しましたが、間伐現場での高性能林業機械の取扱いや伐木造材に対する技術不足を痛感したことから、平成18年から3年に亘り、富樫林業等に出向き、技術習得の修業に努めました。

平成21年には父子が再びタッグを組み、現在に至っています。生産システムは？

現在、作業員は5名で、素材生産はグラッブル4台、プロセッサ1台、フォワード2台の高性能林業機械を独自の手法の下で、効率的に組み合わせたシステムで行っております。段取りは、まず全員で山に入り、作業道の線形(200m/ha)と選木の踏査をします。

次に、作業道の開設、人力伐倒、グラッブルによる木寄せ、プロセッサによる造材、グラッブルによる積み込み、フォワードによる集材、市場への運搬について担当が決められ、各々が作業分担を行うこととしております。

仕事の苦労や課題は？

南加賀の山は雪が多いため、伐採立木の形状がS字性に曲がっていることが多く、目標としているA材・B材の出材が確保できない場合もあることから、もっとC材の搬出を考えると必要であります。

また、機械化林業を進め、各々の仕事分担を明確にし効率性を高めたところ、土場での集積量が多くなる一方、トラックの保有関係から土場と市場の運搬がネックとなっております。

今後の目標は？

現在の生産性は、おおよそ8m³/人・日であるが、これを10m³/人・日まで引き上げるのが

一つの目標であります。加えて、人材の育成確保が必要となっております。現在はプロセッサによる造材は父の敏一さん1人の対応となっており、早く後継者を育てたいと考えています。

また、効率良く仕事を進める段取りをするには、全体を見渡し、掌握できていることが必要であり、康隆さんの現任務が重要性を増しております。

ありがとうございました。時として、仕事の段取りなどで父子で意見の食い違いもあるということですが、お互いに補いながら、熱意をもって仕事に取り組む姿勢は十分に伺えました。

今後も、研鑽に励み、作業の効率化及びコストダウンを図り、地域林業の活性化に向けて更なる活躍を期待しております。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

集落の山、全部間伐します！



八田間伐事業会（七尾市八田町）代表 大松 勲さん

七尾市の八田町では平成25年6月から集落全体の山を間伐する計

画で事業が進められています。八田町の山林は全てで77haあり、52名の森林所有者が存在しますが、ここを集約化した世話人を務める代表からこれまでの苦労やこれからの展望をお聞きしました。

集約化へのきっかけ

平成25年2月に中能登森林組合の林業座談会で間伐事業の説明があり、その時に集落全体のまとまりがなかったら間伐事業は進まないと思いました。

特に、個人個人の境界など考えていたら道も出来ないし収益の分配などトラブルの原因をつくるだけです。

何とか集落が一体化して間伐事業に取り組みないかと考えた末、既存の営農組合の組織を活

かした会を立ち上げ、個人境界の確定や事業剰余金の個人配分は行わないことを決め、森林組合に協力を求めました。

森林組合や県には、現地踏査や森林経営計画の樹立、事業説明など多くの面で協力を頂き大変感謝しています。

団塊世代の使命・義務として

昭和20年生まれで子供の頃はよく杉苗を担ぎ植林を手伝わされました。今、その杉の木を間伐しないまま今後五年、十年先のことを想像すると、山に入ることすら体力的・気力的にも無理になってくる可能性が高いと思われる。

そうならば次の世代に山の管理を任せなければなりません。植えた本人でさえ出来ない間伐を、次の世代に押し付けることなどできません。

森林の関係者が一致協力して間伐を進め、その後の管理・運営については次世代につないでいくのが、私たち団塊世代の責

任でもあり義務を果たすことにもなると考えています。

これからは定年退職して遊んでいたいけど、遊ばれない人ってかなりいますからそんな人にもっともっと活躍してもらおうよという仕掛けづくりを考えていると思っています。

第2期は新ルートの作業道

平成25年度は814㎡（8.26ha）の間伐材を搬出しましたが、集落内を通る道路しか利用できなかったことから至る所に損傷が発生しました。

住民の多くの人から間伐事業に対する批判が寄せられ、一時は事業中止の議論も噴出するほどでした。

このため、次年度は集落を迂回する新たな作業道を計画し、将来に向け汎用性のあるものへと計画を修正中です。

将来は山を周回する基幹的な作業道に整備して、誰もが山へ関心を持つことのできるようにしたいと思っています。

最後に山への思いお聞きしたら、有名な詩で返して頂きました。

「ふるさとの山に向いて言つことなし ふるさとの山はあがたきかな」

△石川啄木▽

集落の山への愛着と将来の姿を夢見て粉骨碎身の努力をなされてる氏の活動を今後とも応援したいと思います。

（中能登森林総合事務所森林部）



この人に聞く

「日本伐木チャンピオンシップ」県代表

金沢森林組合 加藤 一樹さん



競技中の加藤さん

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数が「日本伐木チャンピオンシップ」という林業技術を競う大会が

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数が「日本伐木チャンピオンシップ」という林業技術を競う大会が

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数が「日本伐木チャンピオンシップ」という林業技術を競う大会が

日本です。この大会は9月にスイスで開催される世界大会に出場する日本代表選手を選出するために行なわれたものであります。

今年この大会に県代表として参加し、7位という優秀な成績を収めた金沢森林組合の加藤一樹さんにお話を伺いました。

今年この大会に県代表として参加し、7位という優秀な成績を収めた金沢森林組合の加藤一樹さんにお話を伺いました。

今年この大会に県代表として参加し、7位という優秀な成績を収めた金沢森林組合の加藤一樹さんにお話を伺いました。

石川県森林組合連合会から当組合に出場案内があり、当組合内部から指名されたことでの出場しました。

石川県森林組合連合会から当組合に出場案内があり、当組合内部から指名されたことでの出場しました。

石川県森林組合連合会から当組合に出場案内があり、当組合内部から指名されたことでの出場しました。

石川県森林組合連合会から当組合に出場案内があり、当組合内部から指名されたことでの出場しました。

伐倒、ソーチーン着脱、丸太合せ輪切り、接地丸太輪切り、枝に見立てた丸棒を刺した物を

伐倒、ソーチーン着脱、丸太合せ輪切り、接地丸太輪切り、枝に見立てた丸棒を刺した物を

伐倒、ソーチーン着脱、丸太合せ輪切り、接地丸太輪切り、枝に見立てた丸棒を刺した物を

伐倒、ソーチーン着脱、丸太合せ輪切り、接地丸太輪切り、枝に見立てた丸棒を刺した物を



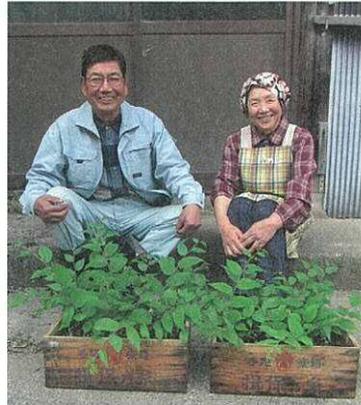
参加者全員

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

過疎山村地で苗木の生産に励む

石川県山林種苗協同組合 副理事長 金田喜一(76) さん(津幡町河合谷)



津幡町河合谷で苗木を生産している金田喜一さんにお話を伺いました。

河合谷スギの当地区ですが、苗木づくりはいつから、その取組の状況は。

親の代から河合谷スギを生産しています。そのころ私は農業をしており、40歳の頃から本格的に従事するようになりました。当時はスギ挿し木苗を生産していましたが、その後、実生によるスギ苗木とヒノキ苗木の生産も行うようになりました。

最も盛んだったのが昭和55年頃で年間6万本、河合谷全体でも45〜50万本の苗木を生産していました。

需給調整が始まるまでは生産が需要をオーバーすることもあ

り、年間2万本以上を焼却処分したこともありました。丹精込めて育成した苗木が日の目を見ずに処分される様に変つらい思いをしたことを覚えています。また、県が主導した「ケヤキ百万本植栽運動」の前後からケヤキを含めた広葉樹の苗木生産に取り組みました。

現在、生産している苗木の種類や生産本数は。現在、スギ15千本、ヒノキ10千本、抵抗性マツ8千本、広葉樹ではクヌギ8千本、コナラ8千本、カシワ2千本、エノキ2千本、ハンノキ1千本程度を生産しています。

また、優良品種えびすケヤキは、生産者3名で1千本程度を生産していますが、最初の頃は失敗続きで、400本作って6本が商品化される程度で、未熟な技術を痛感していた時期でした。現在のえびすケヤキ苗木は熟練した技術のもとで育成しているため、安心して出荷できる状況です。

また、優良品種えびすケヤキは、生産者3名で1千本程度を生産していますが、最初の頃は失敗続きで、400本作って6本が商品化される程度で、未熟な技術を痛感していた時期でした。現在のえびすケヤキ苗木は熟練した技術のもとで育成しているため、安心して出荷できる状況です。

また、優良品種えびすケヤキは、生産者3名で1千本程度を生産していますが、最初の頃は失敗続きで、400本作って6本が商品化される程度で、未熟な技術を痛感していた時期でした。現在のえびすケヤキ苗木は熟練した技術のもとで育成しているため、安心して出荷できる状況です。

また、優良品種えびすケヤキは、生産者3名で1千本程度を生産していますが、最初の頃は失敗続きで、400本作って6本が商品化される程度で、未熟な技術を痛感していた時期でした。現在のえびすケヤキ苗木は熟練した技術のもとで育成しているため、安心して出荷できる状況です。



抵抗性クロマツ苗畑

増やすことも考えています。主伐後の再造林は難しい問題です。苗木の生産は今日聞いて、明日対応できるものではありません。生産には数年かかります。その数年の間に苗木の生産方針が変わることがあれば生産者は困ります。ある程度の期間を見通した需要量の確保が不可欠です。これは生産者ができることではなく、行政に大いに期待するところです。このことを実行願えばありがたい。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

林業の循環を支える苗木生産を担う

有限会社南加賀造林 坂下 修造 さん



有限会社南加賀造林は間伐や作業道作業など
の森林整備に取り組む事業体ですが、元社長の坂下修造さんは4年前に苗木生産者の資格を取得し、現在は社長職を若い後継者に任せ、苗木生産に専念されております。

今回は苗木生産者としての坂下さんの思いをお伺いしました。
○苗木生産の取り組みのきっかけはどのようなことでしたか
会社の作業員の一部高齢化や、冬から春先にかけての積雪による仕事量の減少への対策を検討していた中、平成25年に県が松くい虫被害地への植栽木として抵抗性クロマツの需要増を見込んだ生産者養成研修を行うことを聞きました。ちょうど自宅横に空き地があり、海岸にも近い

ことから苗木生産に取り組んでみようと考えました。

抵抗性クロマツについては、今年度のコンテナ苗を4千本から来年度は6千本に増やそうと頑張っています。現在は、抵抗性クロマツのコンテナ苗だけでなく、少花粉スギ、桑島スギ、日用スギ、そしてヒノキやアテのポット苗にもチャレンジしています。



少花粉スギ苗 (さし木)

○どのような点にご苦労されていますか。

夏の乾燥時期の水分管理は苗木の生長に大きな影響を与えるので、この時期の灌水作業が一番大変です。



マツノザイセンチュウ接種後の抵抗性クロマツコンテナ苗 (2年生)

また、コンテナ苗の培養土にはヤシ殻を使うのですが、根切り虫が発生するため粒剤を散布します。しかし、培養土の露出部分が狭いため、粒剤がなかなか苗木全体に行き届かず、苗木を枯らしてしまつてことがあります。根切り虫対策として、苗木を適正に管理するためのビニールハウスを自己資金で1棟建てましたが、あと2棟くらいあると助かりますね。

苗木生産は2年後3年後の需要を見越して生産を開始しますが、出荷時に計画どおりとならず残苗となることもあり、県・

森林組合等の情報収集が大事だと感じています。

○これからの苗木生産に対する抱負をお聞かせください

山は、木が成長して適度に伐る時が来たら伐採、更新し、若返らせることが大事だと思えます。植栽木は太らせ続けても売値が上がりが続けるわけではないので、時期が来たらどんどん伐って植えていくべきだと思いますし、それに伴い苗木の需要も出てくると思います。

また、これからの育林については、特に地拵えや下刈りなどの作業について、きれいにすることを心がけるのではなく手間や経費をかけないことも大事であり、そのことにより再造林の理解も得られると思います。

そして、このようなことを含め、これからの林業を担う人材の育成に力を入れることが必要だと思えます。これからの行政の施策に期待いたします。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

建設業から異業種参入で原木しいたけ栽培を開始

北興建設株式会社 井戸谷信男さん、滝上雅義さん



滝上 雅義さん(奥)と
井戸谷信男さん(手前)

北興建設株式会社は、昭和54年に創業した建設業者で、平成20年から河北潟で農業に参入し、現在3.6haの農場で露地野菜(すいか、キャベツ等)を栽培しており、昨年からは原木しいたけの栽培を始めました。

今回は担当の井戸谷さんと滝上さんを訪ねてお話を伺いました。

これまでの仕事と全く違う分野への参入に抵抗はありませんでしたか？

会社の意向で、農業担当になりましたが、それまで全く未経験で、最初はやはり不安がありました。

しかし、収穫の喜びを感じる

ことができ、収穫物が高値で売れたときは、やりがいを感じます。

しいたけの栽培を始めたくっかけは？

出身地の珠洲市で、しいたけ栽培をしている親戚や友人がいることから、関心を持ち、畑の一角で昨年からは栽培を始めました。平成24年の春に原木5000本に初めて植菌し、12月に初めて収穫がありました。原木は、能登産を友人から購入したり、本業の建設工事が出る物を使っています。

河北潟でのしいたけ栽培で苦労することはありますか？

冬場の風が強いことと、夏の日差しの強さに苦労します。

強風に対しては、ほだ場を防風ネットですべて対処しています。

また、夏の日差しに対しては、遮光ネットと、散水で対処しています。種菌メーカーの技術者も、こんなところでしたか出てくるのかと驚いています。

今後の計画を教えてください。

今年の春も原木5000本に植菌しました。今後も原木を増やしていく予定であり、2,000本を保有しつつ栽培を続けていくと思っています。

また、現在は露地栽培ですが、雨子が多くなるので、栽培用のビニールハウスを建設する計画を立てています。

また、共販より高収入が期待できる地元スーパーでの産直販売に、現在の農産物にしいたけを加えることで収益の増加を見込んでいます。

会社としても、農業分野へ力を入れるべきだと考え、キャベツ、すいかとともに、原木しいたけを3本柱として事業を推進する予定です。

ありがとうございました。

事務所としても、農業分野と連携して支援していきたいと思っています。

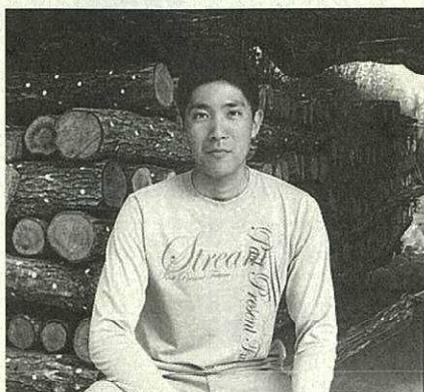
今後の生産量増加、収入増加に期待します。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

二代目く原木生産にこだわり孤軍奮闘く

渡津農林会 代表 水上 智紀さん



白山市渡津町にある渡津農林会では、30年以上のこの生産を行ってきた。平成22年に父から代表を引き継ぐことになり、現在、生産基盤の充実に合せ、キクラゲ、マイタケ、ナメコ、シイタケの4品目を主力とした生産経営を行っている。

今回は、代表の水上智紀（34歳）さんに、現況や今後の展望についてお話を伺いました。きのこ生産を引き継いだきっかけは？

小さい頃から、父のきのこ生産を手伝っていたことや、渡津地区の豊かな自然環境とキノコ料理がとても好きであったことが縁となり、自分で作ったきのこ

こを、沢山の方に食べて欲しいとの思いから、二代目として引き継ぐ事を決意しました。生産から販売の状況は？

最初は、お客さんに新鮮なキノコを食べて貰いたいとのことから、直販所での販売に力を入れていきましたが、今は、金沢中央卸売市場や、カジマートなどの量販店にも出荷するようになっていきます。

菌興115号を使った生シイタケを「鳥越115」として出荷をしています。この「のと115」など他のブランドしいたけに比べて販売単価の面で、大きく水を開けられているのが現状です。

また、石川県内には生産量の少ない「原木キクラゲ」の生産にも取り組んでいます。雪深いこの地域では、思った以上に栽培が難しく、伏せ込んであるホダ木がひと冬越すことが出来ず、収穫は1シーズンと短いなど、目下、試行錯誤の状況であります。

販売商品は「鳥越きのこ」の独自ステッカーを貼ったの差別化や、調理レシピ・保存の方法

などを解説する小チラシの添付などいろいろなサービス努力をしています。

今後の展望について

昨年新たに主力の4品目キノコの生産目標を立て、先ずは原木シイタケ用の発生舎を増設しました。キクラゲは、まだまだ試行錯誤している点があります。4品目すべてが安定生産できる技術力を確立させることを優先したいと考えております。

また、きのこ栽培の繁忙期以外の副収入源として期待の大きいブルーベリーの栽培試験を行っています。

さらに地域の有志でつくる「ほたる保存会」の副会長を務め、環境保全活動にも尽力しており、シーズンになると、每晚10台程度の車がほたる見物に入ってきます。将来を見据え、自然豊かな渡津地区の栽培きのこやブルーベリーの収穫体験を通じて、ブランド力を高め、商品の差別化を図っていく強い気持が感じられました。斬新なアイデアを生かした、同会の今後の活躍に期待しています。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

山に目を向けてもらう取組 薬木・薬草類の採取販売



白山市白峰
にある(株)

白峰産業は、
創業51年の森
林整備事業を
中心とした造林業を営んでいま
すが、数年前から山に目を向け
てもらおう取組の一環として、薬
木・薬草類の採取から販売を手
がけています。

白山市白峰
にある(株)

また、畑では金沢大学の薬学
部の人たちと共同で、白峰の気
候に合う薬草類を栽培していま
す。今栽培しているのが、カノ
コソウ、フジバカマ、ワハツカ、
シャクヤク(ボンテン)、センキ
ユー、ミヤマトウキ、エゾノレ
ンビソウ、サフランです。大き
く分けて採取と栽培の2通りで
行っています。

で、僅かですが収入に繋がる事
が解りました。

文字通り、投資(金・労力・時
間等)に対する効果という意味
ですが、山(自然)に対しては
当てはまらない言葉だと私は思
っています。効果の影響力のレ
ベルが違いすぎるからです。

今回は、取締役専務の尾田弘
好(51歳)さんに、取組のきっ
かけや現況についてお話を伺い
ました。

山で採取する薬木類は、時に
は急傾斜地を上ったり下りたり
で、かなりの重労働です。

煙で栽培する薬草類は、何と
言っても草むしりです。我々の
得意分野の刈払機は使えません。
全部手でむしります。

ここからは、一部個人的な自
論も入りますが、現代社会で蛇
口をひねれば当たり前のように
水が出ます。毎日、米も炊けれ
ば風呂にも入れます。

「費用対効果」も当然大切で
すが、一番大切なのは、昔から
の固定概念にとらわれず、その
時代のニーズに合った取り組み
を絶えず考え、実行することだ
と思います。

4年ほど前から、森林にある
未利用な薬木・薬草類(主に漢
方薬の原料として)を採取・裁
培・加工・販売まで行っていま
す。弊社は昔から、炭・なめこ
の製造・加工・販売は行ってい
ましたが、薬木・薬草類は初め
ての取組です。

どちらか初めての取組みで本
業(造林業)との両立もありな
かなか大変です。

山に目を向
けてもらう一環として取り組ん
でいます。

今回の取材を通して、尾田氏
の過去の固定観念にとらわれず、
常に新しいことを考え、実行す
る強い気持が感じられました。

今扱っているのが、スギ、ホ
ウノキ(コウボク)、キハダ、ヨ
モギ(ガイヨウ)、クロモジ(ウ
シヨウ)、ミズメザクラ、ニオイ
コブシで、これらは山林に入っ

たいという思いがあります。

「費用対
効果」という言葉があります。

新しいアイディアを生かした、今
後の更なる活躍に期待しています。
(石川農林総合事務所森林部)

(株)白峰産業 取締役専務

尾田弘好さん

この人に聞く

能登の里山で製炭業に生きる

大野長一郎さん



珠洲市東山中町で製炭を専門に営む大野長一郎さんにお話を聞きました。

茶道用の炭を焼いているとお聞きしましたが、きっかけは何でしょうか。

平成11年から父に付いて燃料用のナラ炭を焼き始めましたが、安い外国産の輸入品で市場価格が下がり、経営が厳しくなるとともに、県内の生産者も徐々に減少しました。現在も減りつ



お茶炭

づけています！
このような中、ブランド化を目指した道筋を模索しているとき、単価の高いお茶炭のことを知りました。

平成16年からお茶炭に最も適した樹種であるクヌギの苗を取り寄せ、遊休農地に植え始めました。

お茶炭の生産量はどのぐらいですか。また単価は。

平成27年度の実績は、クヌギが1.6tと茶道練習用のコナラが0.4tの計2tです。私が焼く炭の約1割に当たります。
単価は、一般の燃料用がキロ当たり約300円ですが、お茶炭は茶道練習用のコナラが約700円、クヌギの一番良いものは3,000円程度で平均で1,000円ぐらいです。

良いお茶炭とはどのようなものですか。

原材料にはクヌギ、コナラ、カシなどが使われますが、火力が強く、見た目がきれいな最上級品はクヌギが適しています。
断面が真円に近く、樹皮が密着し、皮が薄すぎず、厚すぎず、



初回伐採から4年が経過したクヌギの萌芽林

放射状のヒビと年輪が円の中心から均等に広がり菊の花のように見えるものが良いとされています。このためお茶炭は菊炭とも呼ばれています。

樹皮が剥がれては品質が低下し、販売価格が落ちるため、原木となる立木の伐採適期は晩秋に限定されます。

焼き上がった炭を適当な大きさに切って商品にしますが、お茶炭は長さ、太さの規格が細かく決められており、見た目も重要な要素であり、細心の注意が必要であります。

クヌギ原木はどのように調達していますか。

すべて自家生産です。現在、約6,000本のクヌギ林を管理していますが、今後、さらに2,000本の拡大を考えています。

管理しているクヌギ林の生育状況は

況はいかがですか。

今のところ順調に育っています。最初に収穫したクヌギ林が萌芽更新し、4力年が経過しているため、あと3年から4年を経ると2回目の収穫ができる予定です。

能登地域におけるお茶炭のブランド化は可能だと思いますか。

ブランド化はすでに取り組んでいます。私の焼く炭は「柞」（ははそ）と言うブランドで箱詰めされています。「柞」とはナラ・クヌギ類の総称を意味する古い言葉で、本県では「コナラ」を指す「ほうそ」と同源です。

お茶炭は、大産地であった福島県産が原発事故のため生産できなくなり、また、岩手、栃木等の他産地も生産者の高齢化等で全国的に不足している状況であります。

能登地域全体で総力を挙げて取り組めばブランド化は十分可能と考えます。

今後の目標は

年産10tのお茶炭生産を目指しています。このためには原料のクヌギ原木を自家生産のみで賄うには無理があり、供給体制の整備が不可欠と考えています。能登の里山活性化の一策として、県産お茶炭生産に対する行政の積極的な支援に期待しています。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

東山町たけのこの里を守る

J A小松市たけのこ部会 副部長 吉田 達(とおる) さん



○はじめに

かつて、竹林はタケノコや竹材加工品の資材等の生産のため、県内各地で整備・管理されてきましたが、近年、安価なタケノコや竹材の代替品の増加に伴い、管理されなくなった竹林が増加し、周辺の森林に侵入・繁茂しており、森林の公益的機能の低下をもたらしています。

このような中、小松市東山町は、竹林が適正に管理され、タケノコの名産地として知られ、毎年、初出荷日が金沢よりも4〜5日程度早いと、テレビや新聞等で取り上げられています。そこで今回は、J A小松市たけのこ部会副部長である吉田達さんに、東山町のタケノコ生産のための竹林管理について、お話を伺いました。

○東山町のタケノコ

「東山町史」によると、タケノコの歴史は170年ほど前の江戸時代に遡り、商品としての栽培は大正時代からで、およそ100年の歴史があります。

吉田さんが管理している竹林

かつて、竹林はタケノコや竹材加工品の資材等の生産のため、県内各地で整備・管理されてきましたが、近年、安価なタケノコや竹材の代替品の増加に伴い、管理されなくなった竹林が増加し、周辺の森林に侵入・繁茂しており、森林の公益的機能の低下をもたらしています。

の1帯は、60年ほど前に、国の補助事業により、雑木林を開墾し造成した竹林だそうです。

東山町の竹林は、粘土質の赤土で、タケノコ生産に適しており、土から顔を出す前に収穫するため、色が白く柔らかく、甘みがあり香りも豊かで美味しいと評判で、現在では金沢市から



百年の歴史を刻む東山町タケノコの里

○竹林の管理

タケノコ生産のための竹林の管理作業として、ウラ止め、親竹の本数管理・更新、施肥、除草、天地返しなどがあります。

※タケノコが成長して竹になる途中で、先端部分を揺すって折り、成長の高さを制限する作業

吉田さんにお聞きすると、

・竹林のウラ止めは、雪害や暴風対策になり、また地面に日が当たるようになることから重要な作業で、親竹の本数管理は、竹と竹の間隔を2〜3m取るようにしている。

・親竹は、7〜8年でタケノコ

が出なくなるので、根が腐りやすい梅雨時期に間引きしている。

・除草作業は年3回、草刈り機のナイロンカッターではなく、刈刃で深めに刈り込むようにしている。

・施肥は年2回行い、鶏糞などによる有機栽培に取り組んでいる。

・近年は、イノシシが2〜3月頃に土の中のタケノコを食害するため、大きめのポリ袋をぶら下げるなどの対策をしている。

・東山町では根が張りすぎた竹林を約20年毎に、3mの深さまで掘り返す「天地返し」を実施するが、小松市はこの経費に補助してくれているので、大いに助かっている。



ウラ止めされた竹林

多い年は、特に美味しいものが採れるそうです。

雪国のタケノコは、雪の降らない南の産地のものよりも美味しいといわれ、雪が



「天地返し」の竹林

○東山町のタケノコ生産の今後
現在、生産農家は25軒ほどいるものの、平均年齢は66歳と高く、今後、生産者が減少していくことが見込まれることから、生産者・生産量の確保が重要な課題といえます。

このため東山町では、生産性の悪いところの生産を止め、生産性の良いところだけに絞り、共同で生産するなどといった対応策を検討しているとのこと。

○最後に

美味しく品質の良いタケノコを生産に取り組む姿勢や、東山町のタケノコの産地を維持するため、生産を止めた農家の竹林管理を担い、また、タケノコの里の存続のためにどう取り組めば良いか思案するその姿勢に熱い思いを感じ取ることができました。今後のますますのご活躍を期待しています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

宝達葛の伝承

宝達葛生産友の会代表 佐藤 勝治 さん



宝達地区では、県下で唯一昔ながらの手仕事で行われている葛生産がこれから厳冬期にかけて始まります。今回は宝達葛生産友の会代表の佐藤勝治さんにお話を伺いました。

○時代背景

宝達地区は宝達山が加賀藩の金鉱山だった400年以上前に、多くの鉱夫たちが全国から集まってきた大変栄えていました。過酷な採掘作業を続ける鉱夫たちの健康管理に役立てるため、



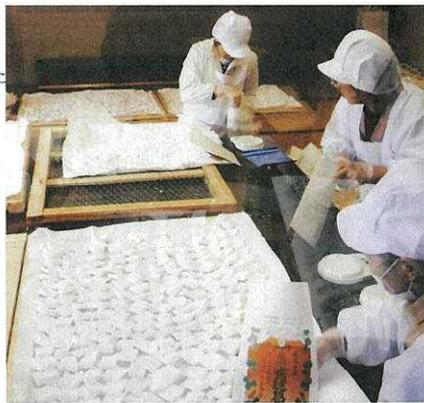
宝達山中腹で採掘(一株130kg)

山に自生していたクズの根を掘り、漢方薬として使っていたのが宝達葛の起源と言われています。大正時代

○伝統的な製造方法

宝達地区には本格的な生産が始まり約70戸が葛づくりに関わっています。戸が葛づくりに関わっていましたが、近年安い製品が出てきたことにより徐々に衰退していき、現在友の会会員4名で生産を続けています。

葛はクズの根から取れる澱粉からできています。クズの根は大きいもので130kgもあり、山から運び出すのは大変な作業です。今でも少しは宝達山系の自生クズを採っています。ほとんどが九州の業者から取り寄せた材量で生産しています。原材料のクズからとれる葛の量は大体8%程度しかありません。それ以下になると生産性が悪く赤字になってしまいます。製法は、まずクズの根を細かく砕いて水を含ませながら足で汁を絞ります。この作業を3回行い、



布で濾してから1晩置いて上に溜まった灰汁を捨て布袋で濾します。そこに水を入れてかき混ぜ、1晩置いて上に溜まった水を捨て布袋で濾します。この作業を3回以上行い、最後に桶の下に溜まったものを豆腐のように切り分けて取り出し、ざるに移して2週間くらい乾燥させて、やっと製品になります。製造期間は1月から4月までの4カ月間で、生産量は年間約350kgです。出荷先は主に町内です。

○今後は

昔はこの辺り一帯で葛づくりは行われていましたが、時代とともに無くなっていき、今ではほとんどありません。機械化す

○最後に

取材の際に佐藤さんが一杯の葛湯をご馳走してくれました。葛をお湯で溶いたものに、少しだけ砂糖を混ぜたものです。昔懐かしい味がして、何とも言えないやさしい舌触りがありました。なんだか少し元気をもらったような気がして、今後も頑張って生産を続けていただきたく願っています。



(中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

祖父母の出造り時代から受け継ぐわさび生産

わさび生産者 白山麓わさび振興会 役員 橋本 和則さん

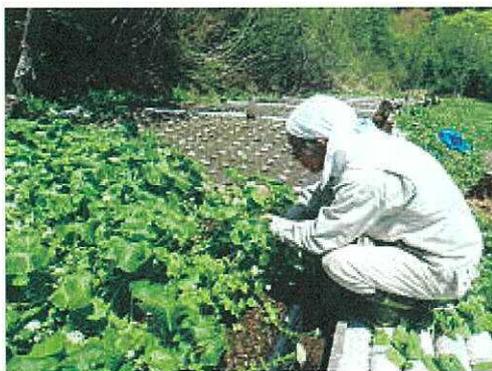


白山麓には、トチノキ・ブナ等の広葉樹林が多く、きれいな湧水を利用した、わさびが生産されています。白山麓で生産されるわさびは「白山わさび」と称されています。

学校を卒業してからは、建築・土木業をしていましたが、昭和55年頃からわさびの生産を考へはじめ、静岡県へ勉強に行き、本格的にわさび生産を開始したのは平成元年からで、生産を開始してから今年で30年ほど経ちました。

○生産されているわさびの規模・品種・栽培方法について教えて下さい。

わさび田は10アールあります。賀茂自交が9割、白山わさび(在来種)が1割です。年間生産量は、根茎100kg、葉柄100kg計200kgです。



わさび田での作業状況

○生産したわさびは、どのように販売していますか。

主に、白山市内・能美市内のJAの直売所3箇所販売しています。春期は、葉柄を束にして販売しています。わさびの花が咲き終わる5月下旬から、根茎の出荷を始めます。根茎のうち大きく育ったものは、金沢中央卸売市場へ直接持ち込んで販売しています。

夏期になると葉は大きく硬くなるので廃棄するしかありませんでしたが、現在は白山わさび

の加工品を作っている(有)松風産業へ販売しており、収入の一部となっています。

○病害虫・獣被害の状況とその対策を教えてください。

葉に青虫が付くので、手で1匹ずつ取り除いています。また、イノシシがわさび田にいるミミズを食べるために田を荒らすので、周辺をブルーシートで覆って対策しています。



葉柄(賀茂自交)



根茎(賀茂自交)

○最後に

祖父母から引き継いだわさび田で数々の試行錯誤を重ね、厳しい自然と向き合いながら、品質の確かなわさび生産に努めておられる橋本さんのもとには、お子さんとお孫さんが遊びがてら手伝いに来るそうです。

(石川農林総合事務所森林部)

○わさびはいつから生産されていますか。
祖父母が出造りで生産していたわさび田に、中学校の頃から親と手伝いに来ていたのが始まりです。

今回は、白山市下田原地内でわさびを生産されている橋本和則さんに、お話を伺いました。

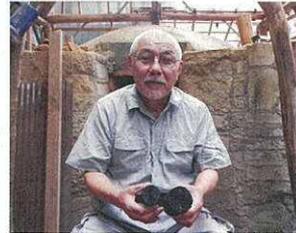
加賀藩主が徳川家へ献上したと言いつたられています。(出典：平成30年度地域食材料利用促進事業調査)

一方、白山わさびは、分けつ苗を植えてから販売できる大きさになるまで3〜5年かかります。個体によって成長に差がみられ、大きく育ったものから順

この人に聞く

石川をお茶炭の産地に

能美市 安田 宏三さん



木炭の生産は、生活様式の変化による炭需要の縮小に加え、外国産の安価な炭が流通するなど、全国的に大変厳しい状況にあります。県内では茶道に使用される「お茶炭」を生産することで収益の向上につなげる取り組みが行われています。今回は、能美市でお茶炭を生産されている安田宏三さんにお話を伺いました。

○お茶炭との出会い

平成2年に能美市鍋谷町で炭焼きを始めると、メディアから沢山の取材を受けました。それを見た人から「茶道をしているの娘がお茶炭を欲しがっているのを見て焼いてくれないか」と言われ、研究を始めました。

お茶炭の産地は岩手県、栃木県、兵庫県、愛媛県などがあるのですが、年々生産者が減少し無くなった産地もあると聞きます。私が本格的にお茶炭を焼き始めたのは15年ほど前です。



炭窯内部

察にも行きましたが、職人が苦勞して得た技術はなかなか教えるはもらえません。

木を伐る時期を変えたり材を逆さまに立てたり色々試しましたが、これだというところにはたどり着きません。たまにうまくいっても歩留まりが悪かったです。研究を重ねるうち、乾燥焚きの工程を長くして材の水分をゆっくり抜くことで皮付きの良い炭が焼けることがわかりました。焚き口の塞ぎ方や煙突を開けるタイミングなどを工夫して、時間は通常の倍近くかかりますが歩留まりは8割を達成しました。

○産地化に向けて

現在県内で4人程がお茶炭を焼いています。珠洲市の大野さん以外は高齢で、産地化のためにはせめてもう一人若手がやってくれたらと思います。また、県内には原料となるクヌギ林がほとんど無く、安定生産のためには植林して適寸で伐ってまわしていくことが必要です。萌芽更新では8年ほどで適寸になるので、それほど気の長い話でもありません。茶道が盛んな金沢に加え全国から注文があります。今は生産量が少なく宣伝できない状況です。通常の炭が300円/kgなのに対し、お茶炭は1,500円/kg程で売れるので、本気になれば事業としてやっていきます。

○30年を経て思うこと

炭焼きは自然のサイクルに身を置き、自然の力を借りてする仕事。そこに自分で工夫して思ったとおりの炭が焼けた時の達成感は格別です。もし誰がこの技術を受け継いでくれる人がいたら惜しみなく教えたいと思っています。

(南加賀農林総合事務所森林部)



木口が菊の花のように美しく焼き上がったお茶炭

○生産で苦労したことは？

お茶炭は皮がきれいに付いていなければなりません。これがなかなか難しい。産地へ視

○炭焼きを始めたきっかけは？
旧国鉄の職員でしたが民営化の少し前に退職し、誘われて地元旅館の副支配人になりました。営業を任せられ中京、関西を飛び回る激務でしたが、山に行けばストレスが消えていき、「自分は里山で生きるのが向いているのかな」と感じていました。ある日、食事に入った炉端焼き店の炭のにおいに子供の頃の囲炉裏や火鉢の記憶が呼び起こされ、炭焼きなら里山で食べていけないのではと思い、46歳から炭焼き

この人に聞く

白峰の伝統を守る菓子作り

有限会社志んさ代表取締役 織田 毅さん



トチノキ
(*Aesculus tubinata*)
は、トチノ

性的高木で、適度に湿気のある肥沃な土壌で育つとされ、県内では白山麓に多く分布しています。

その当時のとち餅は、あまりおいしいものではなかったよう

トチノキ材の価格が上がり、伐採されることが多くなってきた

私は、大阪の洋菓子屋に修行に出たもので、焼くと香ばしさが立つ栃の実を洋菓子に活用しました。

その後、昭和36年に現在の店舗ができ、和菓子を学んでいた父親が現在の原型となるととち餅を商品化しました。

栃の実を拾いに行くと、ぼつかりと抜けていることもあり、栃の実を集めるのも大変になってきています。

具体的には、シュークリームとパウンドケーキですが、他に蜂蜜を使ったカステラも製造しています。

○栃の実はこの様に集めているのですか。

○とち餅の製造工程を教えてください。

○最後に、今後の抱負を教えてください。

その実は、古代から食されてきていますが、サポニンやタンニンの渋み・苦み成分があるためにアク抜きが必要な食材です。今回は、その栃の実を使った白峰の特産品であるとち餅を製造している(有)志んさの織田毅さんに、祖父が建築した店舗兼製造所できるとち餅にかかるお話を伺いました。



主に自分で、白峰周辺で収穫しますが、地域の方が収穫し持ってきてくれます。



まず、栃の実を天日で50日程度乾燥させ、2〜3年貯蔵します。新しい栃

同時に、近年、観光地化されると昔からの手間のかかるお菓子が無いがしろにされているのを目の当たりにしているので、本物のとち餅を残していきたいと考えています。

○白峰のとち餅はいつからあるのですか。

今まで比較的安定した収穫量が得られていましたが、近年、気候変動などの影響なのか詳しい原因はわからないのですが、不作となる年が増えてきています。

れいな色が出にくく、皮も剥きにくいので使用しません。

取材中もひっきりなしにお客さんが来店するなか、丁寧に対応していただきました。白峰に行かれた際には是非お立ち寄りください。

詳細は解りませんが、昔から白峰にはヒエやアワと一緒に栃の実を煮て、栃粥として食す文化があり、盆、正月などには貴重な餅米と併せて栃の実が主体のとち餅を食べていたみたいです。

また、白峰は拡大造林を行った際もトチノキを伐採せずにその周りに杉を植栽するなどトチノキを大切にしている地域だったのですが、独特の杢目が評価され

1晩付け、その後金槌で叩いて実を取り出し、10日程度水にさらし、灰汁で煮て保温しながら2晩ほど放置します。

その後には、シュークリームとパウンドケーキですが、他に蜂蜜を使ったカステラも製造しています。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

オール輪島の輪島塗を目指するし掻き職人

輪島市二俣町

ながひら いさむ
長平 勇さん



長平勇さん

国内で使用される漆のうち国内産はわずか約3%で、輪島塗でも中国産の漆が多く使用されています。

輪島漆器商工業協同組合とともに輪島産の漆と木地を使ったオール輪島の輪島塗を目指す、うるし掻き職人の長平勇さんにお話を伺いました。

○**始めたきっかけと技術習得方法**
平成25年、当漆器組合がうるしを掻く人を募集していることを知り、応募したことがきっかけだ。

幼少のころ、近所に掻き手はいたと思うが、今では身近で経験がある人はおらず、故・古地喜太郎さん（輪島市縄又町）の下で1年間技術を学んだ。その後、国内最大の産地である岩手県二戸市浄法寺で行われた半年

間の研修へ行き、道具の作り方や手入れの方法などを一から教わった。

○**うるし掻きの手順と道具**

ウルシの木の幹にはごつごつした樹皮があり、まず専用の「カマ」で削らなければならぬ。太い木は樹皮も厚く硬いため、これが大変な作業だ。

6月に入ると「カンナ」を使いウルシの幹に「辺」と呼ばれる傷をつける作業が始まる。カンナは、U字形に曲がった刃と先が鋭く上がった「メサシ」と呼ばれる刃がついていて、U字の刃で樹皮に溝を掘り、メサシで辺材部まで傷をつける。この傷から分泌するうるしを専用の「ヘラ」で掻きとっていく。



ウルシの樹皮を専用のカマで削り、辺をつけたりうるしを掻きやすくする

おおよそ4日おきに1本ずつ辺をつけていく。辺は上にいくほど長くなり、晩秋には1か所あたり20辺ほどになる。

○**採取時期とウルシの木の管理**

6月から7月中旬までにつける5辺程度を「初辺」と言い、練乳のような粘度が高いうるし（初漆）と言つゝが採れる。

その後、8月下旬までのものは「盛漆」と呼び、初漆と比べ量が多くさらさらとしている。盛漆はつやが出るので上塗りによく使われる。

一般的には、11月までうるしを採り伐倒する「殺し掻き」が行われ、植栽のほか、切り株や根からの萌芽枝により更新させる。一方、輪島では伝統的に、



ウルシに辺をつけるカンナ

9月以降はうるしを採取せずに、数年後に再び採取する「養生掻き」が行われてきたようだ。

○**これから**

昨年うるしを掻いた木は約40本、今年採取する木はまだ数本しか決まっていない。

輪島市が行った調査では、過去に植栽したウルシが町野から門前にかけて点在して残っているが、まとまって生育している場所はあまりない。木がないことにはどうしたものか・・・。

ただ、続けていかなければだめだ。輪島産の漆を求める塗師がいるからには、唯一の職人として頑張りたい。

△**編集後期**

取材に伺った6月上旬、昨年、長平さんが輪島市三井町でうるしを掻いた幹回り約2m、樹高約30mの巨木からは新たな葉が芽吹いていました。何年か後にまた、この木からうるしが採れるまで、能登に残るウルシを探し求める日が続きます。長平さんの今後ますますのご活躍を期待します。

（奥能登農林総合事務所森林部）

この人に聞く

ウルシの実を活用した和ろうそく作り



高澤 久さん
650年頃、七尾を領地とした前

田家がろうそく作りを推奨したのがはじまりとされています。

七尾は江戸から明治にかけて北前船の寄港地として栄えたため、各地の原料を取り寄せ、出来上がったろうそくを各地に運ぶことができたことから、ろうそくの生産が盛んになりました。

今回は、明治25年創業という120年以上の歴史を持ち、ウルシの実を活用した和ろうそく作りにより「いしかわエコデザイン賞2019」の金賞を受賞され、県内で唯一和ろうそく作りをされている「高澤ろうそく店」代表取締役 高澤 久さん（七尾市）に、これまでの取組みや今後の抱負についてお話を伺いました。

○ウルシの実を活用したろうそくづくりを始めたきっかけと苦

働いた点

輪島市でウルシの植栽活動に取り組む方から、ウルシの実を活用してろうそくを作ることができないかと打診を受けたのがきっかけです。

漆器の産地、輪島市では国産漆の自給のためにウルシの植林活動を行っているとの事ですが、塗り物用に漆を掻けるまでには約20年程度かかるうえ、下草刈りなど育てるのに手間がかかる

と聞いたことから、私たちがウルシの実を購入し、ろうそくを作ることで継続的にウルシの木を増やす活動を後押しできないかと考え、それまでウルシの実を原料とするろうそくづくりのノウハウはありませんでしたが、

取り組むことにしました。まずは、実を蒸した後にしぼってロウをとることから始めました。ロウからろうそくを作る

にあたっては、漆特有の融点を把握することに加えて芯とろう



ウルシの実

にあっては、漆特有の融点を把握することに加えて芯とろう

多くの兼ね合いを見極めるためにも試行錯誤の時間を要し、商品化までには約3年かかりました。

○「うるしろうそく」づくり

11〜12月に採取された実は翌年3月まで自然乾燥され、その後1ヶ月ほどはロウ作りに時間を要し、5月頃からろうそくを作りはじめる、毎年6月頃に販売となります。

輪島市内で採取された実は全量購入しておりますが、まだウルシの木が生育途中であること等から昨年は300kgほどでした。採取できるロウはその1割ほどの約30kgとなり、生産したろうそくは約5千本ほどでした。

おかげさまで「うるしろうそく」は、毎年完売しており、今後も引き続き取り組んでいきたいと思っております。

○「うるしろうそく」の特徴

「うるしろうそく」の特徴としては、炎がオレンジ色で暖かみがあり、ゆったりとしたゆらめきで火持ちが良いという点が挙げられます。

慌ただしい毎日の中で、「うるしろうそく」に火を灯して、



「うるしろうそくの灯」
[写真提供：高澤ろうそく店]

ゆったりと穏やかな時間を暮らしたい中

○今後の抱負

「うるしろうそく」づくりは、1つの大きな「輪」のようなものではないかと考えています。

その輪は、ウルシの木を育む能登の里山、ウルシの木をお世話し実を採る人、私たちろうそくを作る者、そしてそのろうそくに火を灯して下さる方によって成り立ち、この輪によりウルシの植林・保全活動が進み、能登の里山風景や能登の塗文化を次の世代に引き継いでいく、お手伝いができればと思っております。

＜編集後記＞

「高澤ろうそく店」では、ウルシの実以外にも菜種、ハゼなどの天然素材を使って作られた様々な和ろうそくを販売しています。まだ行かれたことの無い方は、ぜひとも足を運ばれてはいかがでしょうかと思います。
(中能登農林総合事務所森林部)

高澤 久さん

この人に聞く

薪ストーブ、使ってみませんか？

株式会社通商燃料

兄後^{あにご}智明・石谷光男



左：兄後さん、右：石谷さん

能登町 宇天坂にある株式会社通商燃料は、4年ほど前から薪やペレットを取り扱っています。代表の兄後

智明さんは能登町天坂でガソリンスタンドを経営しており、木質系燃料の取り扱いを思いついた経緯や今後の展望についてお話を伺いました。
薪生産・販売を始めたきっかけは2008年に原油の価格高騰が起り灯油価格も上がりました。石油は便利なエネルギーですが、価格の激しい変動を販売店ではどうすることもできないのが現状です。そこで石油系以外のエネルギーをガソリンスタンドで取り扱えればと思っただけから始まりです。
薪の材料となる原木は能登町や輪島市を中心とする奥能登地域から椎首原木に出来なかつた大径木を主に買い集めています。

長さ2mくらいの材を専属の従業員が薪に加工し、夏場の乾燥から束にまとめるまでの作業を行っています。樹種は主にコナラで、ミズナラ・ケヤキ・サクラ等も少し扱っています。規格は30×45cmの4種類で年間約200トンを取扱しております。都会のお客様が多く、12.5×30kgの単位で段ボール詰めして宅配しています。都会では薪ストーブをインテリアの一部として意識しているためか、少し値段が高くても綺麗で見栄えのする薪を求められます。一方、地元で定期的に購入されるお客様は見た目より価格を優先する傾向があります。薪はストーブ用以外に、東海地方のピザ屋にも販売しており、年間を通して安定的に購入していただいております。
これからの展望
農産物と異なり薪には付加価値は付けにくいですが、販売を通して都会と田舎では「価値観」に大きな差があると感じています。田舎では価値がないと思っても、都会では高く評価し見合う対価を払ってくれるところがある。そこをよく理解して営業していく必要があると



薪用原木

た消費先があつてこそ取り組める分野です。地域での普及・定着に向けて公的機関が積極的にボイラーやストーブの導入を検討してほしいですし、奥能登地域でエネルギー問題を考えた場合、4市町がバラバラで取り組んでも意味がありません。ぜひとも広域的な取り組みを期待したいです。
株式会社通商燃料はインターネットでも販売を行っています（ネットショップ「天坂屋」<http://tenzakaya.co.jp/>）。木質系エネルギーに関して鋭い切り口でお話いただいた兄後さんと従業員石谷光男さん、お二人の今後の活躍を期待しております。
（奥能登農林総合事務所森林部）

この人に聞く

「田鶴浜建具」の伝統継承とこれから

七尾市田鶴浜町

岡野 繁(63歳) さん



「田鶴浜建具」の歴史は、1650年に長連龍の菩提寺である東嶺寺(七尾市)を建築するために尾張から2人の指物師が招かれ、その精巧な製作技術が現在の田鶴浜地区に伝承されたとされています。

七尾市田鶴浜町で「田鶴浜建具」の伝統工芸継承に取り組む岡野繁さんにお話を伺いました。

岡野さんは家族が建具職人ではなかったのですが、19歳の時に建具職人の道に飛び込み、それ以来44年間技術を磨き上げてこられました。

○どのようなものを作っていますか？

家の建具全般を作っています。木を使った建具で、玄関の戸や襖・障子戸など建具に関するもの全般を作っています。田鶴浜建具は組子細工も有名で、組子を使った高級な襖や折戸なども

作っています。以前、組子職人としてテレビドラマの水戸黄門にも出演したこともあるんですよ。

○建具に使用する木材について、どのような木材が使われていますか。またどのような材が良い材料ですか？

使っている木材は、スギ、ヒノキ、米ヒバ等を主に使っています。スギは良質の秋田スギが一番なのですが現在は資源保護の面から伐採が控えられており、なかなか手に入りません。ヒノキは色が白いのが特徴、米ヒバも色は白いが年数がたつにつれ赤みを帯びてくるので、作る部材や模様に合わせて材を使い分けています。建具は細い材料を使うことが多いので年輪幅が狭いものが良質材として扱われています。特に組子細工は1cmくらいいろいろな部材を組み合わせて作るので、年輪幅が狭く強度が出るものが好まれます。またヒノキやアテは水に強い材なので、玄関戸や雨戸など水が

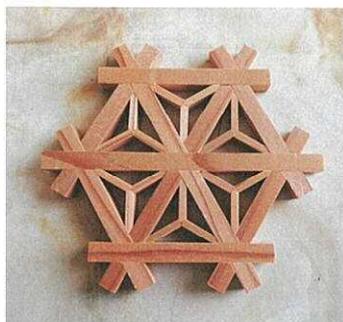
付きやすい建具によく使われます。

○現在の田鶴浜建具の状況は？

私が建具業界に入ったのは19歳の時で80軒くらいの建具屋さんがありました。現在は20軒くらいに減っています。最近建具を使って建てる家が減ったのと、古い家で建具の修理が必要でも、高齢化等に伴い修理をしないという方も増えてきているので需要は減ってきています。20年くらい前に加賀屋さんの改修に多くの建具を使っていたので、その時は忙しかったですね。

○これからの展望について

次の世代へ技術の継承は大変重要なことだと思えます。住宅の様式が変わりつつある中、これまで受け継がれた、高級な組子細工の作り方や基本的な建具の作り方を伝えていきたいです。そして最近はお客さんのニーズにあつた建具の製作にも力を入れていきます。木を使った建具の素晴らしさを感じてもらいたく



お土産品の組子細工(コースター)



組子を使った製作中の襖

て、行燈やおみやげ品のコースター・ミニ屏風なども作って販売・普及を進めています。これからも伝統の建具技術を生かし、未来の住宅やインテリアに「田鶴浜建具」が活用されるよう取り組んでいきたいと考えています。(中能登農林総合事務所森林部)

こ の 人 に 聞 く

木のぬくもりが伝わるきびくらの白山笠

石川県伝統工芸士（檜細工）

河岸すみゑさん



笠作りをしていたこともあり、主人と一緒に白山笠作りを始めました。

昔は年間に500個から600個程度作っていましたが、今は、歳をとったこともあり、年間200個程度しか作れなくなってきました。

販売のピークは3月から6月で、県内のほか、富山県や福井県からもまとまった注文があるのですが、私一人では対応ができませんので、金沢刑務所で矯正教育の一環として、私が刑務所の方に作り方を教え、（刑務官が指導者となって）受刑者にしてもらっているのを助かっています。

江戸時代に白山麓の深瀬集落（旧尾口村深瀬）を訪れた旅の僧により製法を伝えられたとされる白山笠（檜笠）。今回は、唯一の笠作り職人である石川県伝統工芸士の河岸すみゑさんに、製造の苦労や製法などについてお話を伺いました。

○白山笠をいつから作っているのか教えてください。

子供の時から親の手伝いで作っていました。本格的に作るようになったのは、仕事を退職した65歳のころからで、姑が家で

○白山笠はどのような工程で作るのですか。

白山笠はヒナナ（原材料板（檜）を薄く細い径木にしたもの）を作って、これを手で編んで笠を作ります。

昔は地元の山から檜を伐ってヒナナに加工し、使っていたの

ですが、今は地元の檜がないので、県外から製材等がいらなくなった檜の端材等をこちらから指定した大きさに加工してもらい調達しています。ヒナナは自宅で自動鉋（かんざ）を使って作ります。

○白山笠を作る上で大変な部分はどこですか。

笠を編むところはさほど大変ではないのですが、へり取りといわれる笠の縁の部分を編んでミシンをかけるのが大変な作業になります。縁の部分に竹が入っているので、普通のミシンでは針が竹に当たって折れるので、針の太い工業用のミシンで編んでいます。

○白山笠のよいところはなんですか？

畑仕事していても、蒸れず通気性が良くて涼しい。雨の日に笠をかぶっても、檜が雨を吸い込んで膨張し、笠の隙間をなくすことから、雨漏りがしないので雨笠にもなります。



白山笠

○最後に

河岸さんの、「私が元気に家にいる間は白山笠を作っていたいし、誰かが伝統を引き継いでいってくれたらよいが」と語っていたことが印象的でありました。（石川農林総合事務所森林部）

この人に聞く

木彫りでつくる加賀獅子頭

知田工房 知田 善博 さん

石川県の希少伝統的工芸品である木彫りによる加賀獅子頭の作り手は、県内にただ一軒、白山市の獅子吼高原の麓に店舗を構える知田工房を残すのみとなっています。今回は、知田工房の知田善博さんにお話しを伺いました。

○現在、どのようなものを制作していますか。

金沢市や小松市、加賀市内の町会から、新調や修理の依頼を受けた獅子頭を制作しています。赤い獅子頭は安宅町に納品する予定ですが、今年は新型コロナウイルスの影響でお祭りが中止になってしまいました。

獅子頭の制作には様々な職人さんが関わっています。漆は県内の仏壇屋さんに塗ってもらいます。目や歯は真鍮製で一つ一つが手作りです。昔は、かざり職人をお願いしていましたが、そのような職人もいなくなり、今は板金屋さんをお願いしています。



安宅町に納品される予定の獅子頭

○材料は何ですか。

材料は地元産の桐を使います。昔は下駄や箆笥にも使いましたが、今はほとんど使われないので、支障木など伐採された桐が出たときに購入



材料の桐は乾燥しすぎないように寒冷紗をかけて保管している

しています。桐は屋外で保管しますが、5〜6年経つと乾燥しきってしまい堅くて彫れなくなりします。獅子頭は、木口面を正面にして彫りこみます。獅子頭が大きいとより太い木材が必要となりますので福島の会津や新潟県から取り寄せることもありますが、それでも出材は多くありません。



古くなった獅子頭（手前）と新調される獅子頭（奥）

○いつごろから獅子頭を制作していますか。

創業者は父の知田清雲で、加賀の伝統工芸である獅子頭の彫刻を学び、知田工房を立ち上げました。私は、高校卒業後、金沢の彫刻家、今英男氏の元で7年間修業し、その後、知田工房で獅子頭を制作しています。息子は、現在、大阪の仏師の元で仏像の彫刻を学んでおり、修業が終われば帰ってくる予定です。

○どこで購入できますか。

加賀獅子はお祭りの主役として活躍していますが、魔除け、厄除けの守り神として、床飾り、玄関飾りにも喜ばれています。現在でもお正月やお祭りの飾りは勿論、各種のお祝い（新築祝、結婚祝、出産祝、節句等）に用いられ、縁起の良い置物として、年間を通して親しまれています。

獅子頭の置物やアクセサリーは、知田工房のほか、白山比咩神社の駐車場に隣接する「くるゆりの里」でも販売しています。また、パーク獅子吼内の獅子ワールド館では、日本の木彫り大獅子頭や世界各国の獅子舞、獅子頭が展示されています。是非、行ってみてください。

（県石川農林総合事務所森林部）



制作中の知田善博さん

この人に聞く

「木」の魅力で人と人を繋げる

榊シモアラ副社長 下荒 朋子 さん

加賀市柏野町に本社を構えるシモアラホールディングス株式会社は、製材・建設業を営む株式会社シモアラを傘下に抱えています。

2020年、小松市北浅井町に「そらのあそびば ハレノチクモリ」(以下ハレクモ)を造られました。この仕掛け人である副社長の下荒朋子さんに、お話を伺いました。



下荒朋子さん

○副社長はもともと木材業界で働いていらっしゃったのですか。
結婚するまでこの業界に携わったことはありませんでした。最初は右も左も分からず苦労しました。今では弊社の経理・労務の全般を担当しています。
○どのような経緯でこの施設を造られようと思ったのですか。

共働きの家庭が増えて子供が家族といられる時間が少なくなっている。昨今、遊びを通じて子供達と向き合う時間になってほしいと思いました。この家族を繋げるツールとして「木(県産材)」をふんだんに用い、五感を使って遊べる空間を造りたいと考えました。

大人も童心に戻り、一緒にわくわくする気持ちを引き出してほしいと思います。たくさんのお親子がこの場所でお会いすることで、地域の輪が広がることを願っています。

○「ハレクモ」の予約状況はどうですか

おかげさまでご好評いただいています。今は新型コロナウイルス感染症防止の観点から利用人数の制限をしていますが、リピーターの方も増えてきています。平日は末就学のお子さんを中心ですが、土日は小学生のお子さんも多くいらっしゃいます。ハレクモは、それぞれが楽しみを見つけて遊ぶことができます。横を見ると穴がある、見上げれば階段がある。意識しなくても遊具や空間が

導きとなって発見や冒険、探求につながっていく。新しい遊びが自然と生まれる配置にこだわりました。ワークシヨップも定期的に実施しています。季節に応じた木工作教室や、人形劇なども取り入れて、何度でも足を運びたいような工夫しています。

○今後は、この空間を使って子育てを支援するような活動ができないかと模索しています。子育ての悩みを相談できたり、育児について学べるお手伝いができたらと考えています。



ワークショップ
木工



家族で遊ぶ

○施設を利用される親子の反応や感想をお聞かせ下さい。

施設全体が「いい香り」というお声をよくいただきます。また、利用される方には基本的に裸足で遊んでもらっていて、「床が気持ちいいね」と喜んでいただけます。手で触れて感じる木の温もり、好奇心を刺激する遊びのしかけに、さらさらした表情で遊ぶ親子を見て、嬉しくなりま。これからも、この世界観に想像力を膨らませて楽しんでいただけたらと思います。



すべり台も楽しいよ!



絵本を読んでもらおう

○今後の展望をお聞かせ下さい。

暖かみのある木の手触りや香り、柔らかさ、叩いたときの音など、樹種によって木の特徴は違います。ハレクモを利用された方には、そういった木の個性をめいっぱい楽しんでほしいです。

日本の風土に根付いた、このすばらしい木の文化を次世代につないでいきたい。ハレクモがその一助になればと思います。



ハレクモの塔と施設内観

そらのあそびば ハレノチクモリ
【電話】0761(23)3616
【URL】
<http://harenochikumori.com>
※利用予約が必要です
(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

能登ヒバの魅力で木材産業を活性化

鳳至木材株式会社 取締役 四住 一也 さん

輪島市中心部に近い山岸町にある鳳至木材株式会社は、昭和21年に創業した奥能登地域での大手製材業者です。今回は同社で能登ヒバの魅力を発信し続けている四住取締役にお話しをお伺いしました。



四住取締役
(鳳至木材 玄関前)

○この業界に入られたきっかけは。

地元の高校を卒業後、東京の大学へスポーツ推薦で進学し、経営学部で学ぶ一方、関東で有力な野球部のピッチャーとして東都リーグで活躍するなど野球漬けの学生生活を送っていました。

大学卒業後は、2年間東京の製材会社で営業をしていましたが、親孝行がしたいとの思いから、古郷に帰り、父の跡を継ぐため鳳至木材に勤

めることにしました。

大学の野球部では、活躍できた一方で、練習でつらいことが多くあり、これは今の仕事で逆境を乗り越えていく原動力になっています。

○どんな仕事をされてきましたか。

鳳至木材に入ったとき、私は製材・配送を主に行っていました。会社はとても忙しく、仕事をこなさけない状況でした。朝注文を受けたあとすぐに、在庫を出したり製材したりして、当日10時頃までに注文の品物を揃え、工務店に配送するあわただしい毎日でした。今でも市場から自分が買い付けた丸太は、自分で製材することがあります。

20年くらい前からは能登ヒバの魅



製材工場内の様子

力を発信する活動をスタートし、石川の農林漁業まつりをはじめ東京ビックサイトなど様々な場所でエンドユーザーに認知してもらう取り組みを続けています。能登ヒバの眼鏡フレーム、樹皮から作った手すき和紙の名刺や壁紙などを共同で作成したり、市内建築物での利用やマスメディアで取り上げってもらうなど、ブランド化に取り組んできました。

今は県内製材業者の方々とチームになって、能登のスキも含めた県産材を使ってもらう活動に特に力を入れています。公共物件に取り入れてもらえるよう様々な会議に出席して、県産材をプレゼンするなど、金沢城の河北門や、最近では、新しい県立図書館などの県産材供給に汗をかいてきました。

こうした公共建築物向けには、フローリングや羽目板、ルーバーなど膨大な量を調達する必要があり、また、関係者の利害調整は難しいことですが、売り手、買い手、地域の三方良しの考え方が大切だと思っており組んでいます。

○能登ヒバの魅力については。

能登ヒバには、シロアリ、ダニなどの防虫効果、カビなどの抗菌効果、ヒノキに勝る強度、水、湿気に強いことや光沢と香気があることなど様々な特徴があります。そのような

能登ヒバの高級感を生かすため、乾燥時の内部割れを防ぐなど、当社では独自の工夫を凝らしています。

また、ヒノキの値段が下落傾向のなかでも、ブランド化の定着により能登ヒバの評価が高いことから、値段は比較的安定していると思っています。能登ヒバを核にして商売したからこそ、同業者の数が少なくなる中で、鳳至木材が今生き残ることができたと考えています。

そして、能登のヒバは能登にしかなく、ここでほとんど使うことにより能登の林業が成り立つと思っています。

○林業・木材産業に今思うことは。

最近、コロナ禍のウッドショックで木材の価格が上がっていますが、外材でなくもつと地元の木を使う健全な流れができてほしいと思います。また、せっかく長い年月をかけて育てた木を、バイオマスなど価格の安いものを使うのではなく、建築に使う、山主へ還元できるお金を増やすよう努めるべきだと思います。

川下側については、目先のことだけでなく、安ければ何でもいという風潮ではなく、森林が持つ多面的な役割などが大事なことを納得して買っていただくことで、林業・木材産業の発展につながると考えています。
(県奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

100年以上続く伝統工法で木の魅力を伝える職人集団

(株)沢野建設工房 代表取締役 澤野 利春 さん

かほく市七窪にある株式会社沢野建設工房は、明治16年(一八八三年)に創業した河北郡市の大手木造住宅業者です。今回は、現在、県内で最も多くの社員大工を抱え、昔ながらの伝統工法を守りながら家を建てている澤野利春代表取締役にお話を伺いました。



澤野代表取締役
(会社の玄関前)

○現在、社員大工は何名ですか。

当社の社員大工は18名います。見習い大工から70代まで幅広くおり、毎年、見習い大工を募集しています。県内の工業高校や普通高校を卒業して入社する人や隣の富山県には、大工と植木職人の育成を目的とした職業学院という専門学校があり、全国から生徒が集まっています。そこで

大工の基本的な技術を2年間学んだ卒業生も現在3名います。

○昔ながらの伝統工法とは。

前提の話として、私が今考える家づくりというのは、「元々の原点として建物に求められていた事は、家族を守る器(うつわ)が住まいということなんです。」原始時代、縄文時代、弥生時代からそうであったが、今、本当の意味で家族を守る器が、そういう住宅になっているかと考えたらずうなっていない。

なぜかという、住宅の高気密・高断熱化が進み、たくさんの化学物質や工業化製品で作られた家では、人間が生活していくと一番大切な健康が奪われるような空間が出来ている。それを真に家族を守る器である家を提供する中で、人間が求めている事のマイナスの部分の器を「素敵や」、「かっこいい」、「値段が安い」、「値段が高い」とかで提供していくのがいよでした。

当社では、伝統工法というのは、化学物質、工業化製品を出来るだけ使わないこととプレカットをしない

ことによって、大工職人が知っている技術の中で、製品をチョイスしていく目利きを持った人間がやれるという事で、墨付け、手加工、具体的には、継手・仕口(しぐち)を手刻みで加工しています。

それによって、私たちが求めている家づくり、お客様にとって真に良い家というのを提供できると思っています。

○県内で、この伝統工法(墨付け、手加工)で家を建てている住宅業者は他にありますが。

会社組織としてやっているところはないと思います。当社では、若い大工職人の墨付けと手加工によって建てた「伝承棟」があり、伝統工法の木組みや手加工を次世代に教え伝えていけるように取り組んでいます。



伝統工法 伝承棟

○使用する県産材の割合を増やしていくため、供給側に望むことは何ですか。

能登ヒバを比較的多く使っていますが、丸太を安定的に供給してもらい、製品の品質の確保をして欲しいと思います。

全国の流通を見ると、本県の県産材のコストは高く、製品としてどれだけ取れるのか。製材すると大体1/3ぐらいが製品になり、歩留まりに課題があります。

例えば、ウッドショックになる前は、県産材製品が1㎡当たり6万5千円していたら、三重県とかのヒノキ材は1㎡当たり5万円〜5万5千円で県産材より必ず安かった。それだけ大量に出ているから安く売れる。なぜ普及しないのか、流通を安定させてほしい。県内の木材市場に出ている材が少ない。能登ヒバは大幅ブランド化されてきたが、スギ材については、全国で流通している製品価格は、県産スギの価格よりも安い。価格も全国と肩を並べるくらいにならないと難しく、それには、製材コスト等が影響している。

もっと県産材をPRして、その材の特性や特質を普及啓発しないと広く浸透していかないと考えています。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

「木は長く気も長く100年以上続く2年熟成醤油」

近岡屋醤油株式会社 おかみ代表取締役 近岡 志緒美 さん

ヤマチ醤油として販売している近岡屋醤油株式会社は、大正8年に創業した宝達志水町今浜にある町内唯一の老舗醤油店です。

昔ながらの杉樽木桶で、醤油を造り続けているおかみの近岡志緒美さんにお話を伺いました。



おかみの近岡志緒美さん

○400石のもろみを天然醸造している小さな蔵

全国的に製造業では、組織の大規模化や機械化が図られています。近岡屋醤油は昔ながらの木造の蔵で、創業以来大切に使用してきた杉樽木桶や麻布などを使って醸造をしています。

一般的に機械化された醸造所では6ヶ月程度で出荷しますが、当社は



蔵の内部

杉樽で2年間じっくり自然発酵させてから出荷していただきます。醤油のもともともろみを搾って得る生場(きあげ)は、昔ながらの製法で造っています。

○蔵や杉樽木桶に宝ものが棲む

杉樽木桶などは明治18年から続く蔵の中で100年以上使われており、代々の蔵人達の醤油造りを見守ってきた酵母菌や乳酸菌などの微生物が、蔵や杉樽木桶等に棲んでおり、かけがえない大切な宝物となっています。その宝物を先



杉の木桶

祖代々大切に引き継ぎながら醤油造りをしています。○地元こだわった醤油づくり

醤油業界は、1970年代をピークに出荷量が年々減少してきており、当社も例外ではありません。創業以来、地元の方々、能登の気候風土などに支えてもらい



海風と時のたから ながら、地元の蔵人による杉樽仕込みの醤油づくりを

守り続けています。

天然醸造醤油「海風と時のたから」は、創業時代に立ち返り、厳選された町内産の素材を贅沢に使い、杉樽で2年間じっくり熟成することでできた商品です。

○地元の木にこだわる

この醤油醸造所の蔵は明治時代から昭和にかけて建築されたものがありますが、4代前の当主が当時砂丘状態であったこの地に松の植栽を積極的に行い、屋敷の防風砂林を造成し建築したものです。

私が嫁いだ頃の海岸の松林は、海からの風によって内陸側に大きく傾き、なんて綺麗な松林だろうと思っ

ていましたが、最近では松くい虫の被害でスルスルな松林となってしまう非常に残念でなりません。

明治時代から使用している木桶は、蔵の形に合わせて作られているため容易に交換等はできません。また、木桶には菌類が棲んでい

用していますが、使用していない6原については水漏れ等で使用できない状態のものもあります。

今後、交換や修理などを検討しなければならぬのですが、地元の杉で樽や桶を製造・修理できる職人がおりません。当社の存続にかかわることですので、是非、県内で杉の樽や桶を作る職人が育つことを願ってやみません。

△編集後記▽

10月8日は「木の日」ですが、10月1日は「醤油の日」であることから木との深いつながりを感じます。

杉樽木桶は、日本酒や醤油、味噌、酢など、食生活に関係する色々なところで必要とされており、国内には木桶や木桶職人を確保するための活動をしているところがあると聞いています。

今回の取材を通じて、これらの材料となる木材を生産する人材や木桶など木材を加工・利用する人材を確保・育成する、より一層の取り組みが必要であると考えています。

・こだわりの杉樽木桶の天然醸造蔵の情報はこちら

<https://www.yamachi-shoyu.co.jp/>

・近岡屋醤油おかみさん日記

<http://sugidaru.com/>

(県中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

風土や文化に根づいた音を奏でるギターづくり

近撥弦楽器 店主 近信濃さん

小松市大文字町にお店を構える『近撥弦楽器』は、クラシックギター（以下「ギター」）、ウクレレの製作等をしている工房です。この工房の店主である近信濃さんにお話を伺いました。



近信濃さん
(能登ヒバで制作した表板)

○ギター製作を生業にしようと思っただ経緯を教えてください。

東京都に生まれ、学生時代から独学でギターの修理や製作をしていました。社会人になってからも建築会社勤めの傍らギター製作を続け、2009年に「近撥弦楽器」を設立し、本業としてギターやウクレレの製作を開始しました。2011年に妻の実家がある石川県小松市に移住し、2019年4月には工房を新し

くしました。現在、この工房で作業しています。



心を込めてギターをつくる



お店に並ぶ様々なギター

○ギターづくりのこだわりを教えてください。

これまでは弾く方の手の大きさ・音やボディシエイブの好み・材料・スケールなどに合わせ、フルオーダーにより注文を受けていました。フルオーダーだと時間と値段がかかるので、今年11月からセミオーダーによる受注も開始しました。セミオーダーではデザインだけ統一し、フルオーダーと同じ精度や材料で値段を下げた製品を提案しています。

ギターの正面に見える表板は、音を出す上で最も重要な部材です。この表板で空気を振動させ、ギター本体から音を出します。このため、表板の製作中は叩きながら音の振動を

確認しつつ、作業をしています。

木材以外にもこだわっており、できるだけ合成接着剤・合成塗料を使用せず、天然素材のものを使用しています。一本のギターが完成するまで、フルオーダーで3ヶ月から4ヶ月、セミオーダーで2ヶ月半から3ヶ月かかります。

○能登ヒバをギターに使うと思っただきっかけや、能登ヒバとギターの相性について教えてください。

ワシントン条約で、今まで自由に使用していた外材が使えなくなっただけがきっかけです。外材に替わって、国産材でも遜色ない音を奏でるものがないか研究しており、桐や能登ヒバなどの新たな素材に挑戦しています。ギター製作に一番適している木材はジャーマンスプルースなのですが、能登ヒバはこれと比較して遜色なく、材として粘り気があり、音とサステイン(余韻音)がとても美しく、ギターとの相性が良いです。

なお、国産材は繋がりのある家具屋の方を通じて仕入れています。

○能登ヒバをギターに使う際の工夫を教えてください。

通常、ギターの表板に使用する木材は大径材を使用し、2枚の板をつなぎ合わせて1枚の表板を作ります。しかし能登ヒバは、大きい径のものが手に入りにくいので、3枚つな

ぎ合わせて表板を作るなどの工夫をしています。3枚のつなぎ合わせでも、きれいな柾目のものであれば問題ありません。近年能登ヒバは、径の大きなものがある程度に手に入るようになったとの話を聞き、これから使用の幅を広げていきたいと考えています。

○今後の展望をお聞かせ下さい。

ギターは、世界各国にその地域に根付いたものがあります。私もこの日本国内で石川県の木材を用いて、地域の風土や文化に根付いた音を奏でるギターを作りたいと考えています。令和4年1月には阪急百貨店つめだ本店(大阪市)で、展示販売会に出店します。この時に、能登ヒバのギターや端材を活用したブローチも持参する予定です。このような活動を通して、石川の魅力やSDGsに貢献していきたいと考えています。



端材を活用したブローチ

近撥弦楽器

【連絡先】

info@konhatsugengaki.com

【URL】

https://konhatsugengaki.com/

(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

「薪で焼いたピッツアとこだわり雑貨の店」

「もく遊りん」 福江 翔太 さん

「もく遊りん」は、白山市獅子吼高原のふもと自然あふれる森の中にあります。今回は、もく遊りんでの雑貨を販売する「木工房」と、素材を活かしたピッツアを味わえる「食工房」の企画・運営に関わる福江翔太さんにお話を伺いました。

「もく遊りん」は、白山市獅子吼高原のふもと自然あふれる森の中にあります。今回は、もく遊りんでの雑貨を販売する「木工房」と、素材を活かしたピッツアを味わえる「食工房」の企画・運営に関わる福江翔太さんにお話を伺いました。

もともと、大手パレル会社に就職しており、店長として全国の店舗を渡り歩いていました。長男の誕生を機に、転勤の無い仕事に就きたいと考え退職し、地元である小矢部市に帰りました。DIYが好きだった父親の影響もあり、家具職人を目指すことを決意し、職人学校を経て2014年に株式会社角永商店に転職しました。

2017年からは、もく遊りんの企画・運営を任せられました。この仕事も、木の良さをお客様に伝えられることにやりがいを感じています。



「フクフク」を持つ福江翔太さん

○商品へのこだわりはありますか。
角永商店の製材部では、1日4トンもの端材が発生しています。この端材を使って何か商品化できないかとずっと気になっていました。黒板を作るワークショップでヒントを得て、黒板消しやホコリ取りに使える「フクフク」をスギの端材を使い商品化しました。

おかげさまで評判も良く、全国展開する雑貨店でも取り扱っていただいています。「フクフク」に使用しているスポンジは車の座席にも使われている、へたりにくいもので、布の部分は倉敷で作られたものを採用し、1個1個手作りしています。

また、外箱は、メッセージを書いて贈ることができるようになっており、外箱を組み立てて「フクフク」置き場として使用することで、使うたびにメッセージを見てもらえるような工夫をしています。値段は、決して安くはないですが、このような付加価値を付けていくことで商品の価値が高まっていくと考えています。さらには、木材だけで商品を作るのではなく、他の素材と組み合わせることで木の良さが際立ちます。鉄、プラスチック、布など異素材を組み合わせることで、木材業界以外の方々にも木材の良さが波及していきます。



スマホなどのホコリ取りに

○木工房にはどのような商品がありますか。

もく遊りんではピッツアが人気で、食工房に食事に来られたお客様が待っている間に木工房にも足を運んでいただけるような商品をそろえています。

1階には、女性をターゲットとした木のおもちゃやかわいい小物を、2・3階は、木を使って遊ぶことをテーマに、DIYグッズ、キャンプ用品などをメインに県内ではあまり見られないものにこだわった商品が置いてありますので、是非、遊びに来て下さい。

これからも、異業種の方と一緒に活動を行うことで、新たな刺激を受けながら木材の良さを広めていきたいと考えています。

(県石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

建具の町の里山整備

まちなか里山公園づくりの会 代表 山元 広隆 さん



七尾市田鶴
浜町の東嶺寺
の裏山でボラ
ンティア活動
を始めた「ま
ちなか里山公
園づくりの会」代表の山元さん
にお話を伺いました。

●田鶴浜は建具で有名ですが東嶺寺との関係は

東嶺寺は、かつてこの地方の領主の菩提寺として2人の指物師により建立されたことが田鶴浜建具の発端となりました。優れた技術を持つ2人に村人が競って弟子入りし、それ以来、精巧で優美な細工と高度な仕上がりを持つ田鶴浜建具の製造が始まったという逸話をもつ由緒ある寺です。

寺は町の中心部に位置し、周辺には豊かな自然を有している貴重な森林がありますが、檀家の人々を含め、手入れを行う関係者も少なく、さらに高齢化が進んでおり、このままでは町のシンボルの寺やその周辺の



田鶴浜建具の発祥のお寺

里山の自然がなくなってしまうと心配されているところです。

●ボランティア活動の大変なことや喜びは

会の立ち上げは平成23年度からですが、最大の悩みは「人」「物」「金」を如何にして賄うかでありました。そもそも立ち上げたメンバーは素人で道具は鉦か刈払機しかなく本格的な作業を行うには人も資材も不足しており、私自身も活動資金の確保に奔走していた感がありました。

そんな中、七尾市や県から補助事業の採択を受けることが出来たことや賛同者が増えたことが一番の喜びです。

賛同者の中には、重機のオペレーターや自動車整備の経験者があることから本格的な作業も可能になりました。

今では、バックホウ等の重機を使い、歩道の整備や間伐材の搬出、竹のチップ化などを行い、荒れていた森林は見違えるほどに変わりました。

●これからの活動展開と将来目標は

現在の会員は30名程度で、月2回を定例として山作業を行っています。今後は、子供たちの遊び場や



侵入竹の伐採除去

遊歩道の整備を行い、四季折々の里山散策ができるようにしたいと考えています。また、東嶺寺を拠点とした歴史的な背景を学び、知ることも重要であると考えており、地元の人々ばかりでなく、観光利用客も招き入れる場所にできればと思っています。

この里山公園を多くの方々に親しんでもらうために、今後も地道な活動を続けながら次世代に引き継いでいくことが将来の目標です。

最後に、七尾市の「底力向上支援事業」、県の「森づくりボランティア推進事業」、「森林山村多面的機能発揮交付金」の支援を受けていることをこの場をお借りして関係各位にお礼申し上げます。

(中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

森林公園に新たな魅力を

森林セラピスト 坂本美津子 さん



津幡町の森林公園が森林セラピー基地に認定され、昨年の4月にグランドオー

ブンを果たしてから、もう1年余が過ぎました。これまで、様々な体験プログラムが行われ、昨年度は全部で260人余りの人が体験されています。

そこで、このセラピープログラムの開発や、体験活動の実施を中心となって担っていらっしゃる森林セラピストの坂本さんにお話を伺いました。

森林公園はスマートフォン

森林セラピーはアプリ

坂本さんはかねがね、森林公園で「新しい形での体験」を提議できないかと思っており、それがそもそも、森林セラピーに取り組んでみようと思ったきっかけだそうです。

森林公園には、ほかの全国のセラピー基地とは違って、都市部から近いという特徴があり、

金沢から車なら数十分で気軽に来ることが出来る。

そして、森林公園には、たくさん魅力がある。多機能なところだと。例えて言えば、スマートフォンみたいなもので、そして、森林セラピーはアプリなんだと。動物達と触れ合える場所や、ゴルフ場なんかもアプリ、そしてそのひとつがセラピーだ。こう考えるとわかり易いのではないのでしょうかとしました。

セラピーのメニューには現在どんなものがあるのか？

基本的なものとして「セラピープラス」があります。基本的なセラピーのメニューに、食事や、ヨガなど、何かプラスして体験してもらうところから名づけられたそうです。

この名前は石川県の森林公園オリジナルのもので、インターネットで「セラピープラス」と検索すると、森林公園が出てきます。

そのほかにも、子供向けに「セ

ラピーアクト」というメニューをつくられ実施なさっています。アクトはact、行動です。今年からは、「セラピーユアーズ」というメニューを提供されています。

これは、自分の好きな時間にやってみたいメニューから自由に選んでもらって、体験してもらうものです。あなたの為にメニューをカスタムして行いますといったところでしょうか。

坂本さんの森林セラピーのイメージは、名前が内容を表している、それぞれ意味があるわけです。

今後は？

森林浴と一般的な旅行を比較すると、森林浴のほうが、ストレスホルモンが劇的に下がるという科学的な知見があるそうです。一般旅行だけでは、ストレスの解消にならないばかりか、かえって、ストレスをためることもなかりかねないと。

ですから、たとえば、石川県に観光に来てもらって、最後に

短時間でいいから森林セラピーを体験してもらうことで、心も体もリフレッシュして帰ってもらえるようになる。こんなことが出来たら良いと、また、今、新幹線も開業しましたから、いずれ、首都圏方面からのお客様も来ていただけるとうれしいです。ねともおっしゃっていらっしゃいました。

「石川県森林公園」では、今年も様々な森林セラピーのメニューを実施しています。

興味がおありの方は、ホームページに内容が詳しく乗っていますので、ぜひ、「森林セラピープラス」で検索してみてください。

(県央農林総合事務所森林部)



ヨガ

この人に聞く

林業応援団を増やしたい！



もりらバー林業女子会@石川 代表 砂山亜紀子さん

●「もりらバー林業女子会@石川」って？

全国に17団体ある林業女子会は2011年京都で始まり、わたしたちはその7番目として、2013年2月に発足しました。林業に関わる女性の集まりではなく、山仕事をするのでなく、「木が好きで森が好き。この大切さを正しく伝え、今私たちにできることからやろう」とボランティア仲間と木を題材とするクラフト作家さんら4人でスタートした林業素人の女子会でした。山や木に関心を持ってくれる人を増やすため、「楽しい・カワイイ・おいしい林業」をテーマに、「間口を広く、ハードルは低く」どんなことでもきっか

けになればいいなと活動しています。

●どうして「林業×女子会」なのですか？

林業は生活に密着した大切な産業なのに、仕事を目にするのも少なく口に入るものでもないので、どこか「関係ない」って思っている人が多いと感じていました。お水も、お米も、畑も、魚も全部山からの恵みで育てられている。「関係なくないと知ってほしい」という思いが強くなりました。女性は母となり産み育てます。主に家の中を取り仕切るのも女性。女性が変われば世の中が変わる。女性が女性に伝えることで伝わる言葉がある。と、女性をターゲットとし女性にわかりやすく親しみやすいテーマで活動することに決めました。

●具体的にどんな活動をしていますか？

例えば、まず森を好きになってもらおうと遠足に出かけます。

「女性一人では興味があっても山に出かけられなかった」という人が「女性ばかりだから」と参加してくれて、「楽しかったので」と翌年お友達を連れて来てくれます。女子力100%の【アロマオイルのブレンド】や【カホンプロジェクト（南米の太鼓カホンを作る）】【おいしい林業（キノコ・山菜・ジビエ・薪ストーブクッキング）】というイベントでは、本来の目的は別にあっただろう人たちが「来てみたら林業の話だった」と言っていて、そこから違う回にも参加してくれることがあります。また、これらの企画を考えたり準備するのを女子会11定例会【月1☆もりらバー】と位置付け、毎月1回集まってお茶を飲みながらおしゃべりしています。

●今後について教えてください

昨年、初めて本職的林業従事者の人たちと協力して「キ☆コしくキコリノシゴトコレクショーン」というファッションショーを豎町のメインストリートで開催しました。衣装を見せるファッションショーとは違い、林業の仕事を通りすがりの関心の高い人に魅せることを目的に、普段通りの汚れた作業服姿でLEDカーペットの上を歩いてもらいました。たくさんの方が足を止めて見てくださり、観客には新鮮な驚きを、出演者には知ってもらおう喜びと刺激を感じてもらったことに「今年も見たい！出たい!!」という声が多数あがり、10月2日(日)金沢駅鼓門下で開催する予定で準備をしています。こうして「まず自分たちが楽しみ、できる人ができる時にできる事をする」もりらバーは78人になりました。少しずつ林業の事を知り、ジブンゴトとして自らの言葉で発信する林業応援団を増やしていきたいです。

もりらバーのFB<https://www.facebook.com/morilover2013/>
もりらバーのHP<http://morilover2013.wix.com/morilover>
(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

健やかな松林を次世代の子どもたちに

いしかわ「能美の松原」サポートクラブ

能美市根上地区で松林の保全活動に取り組んでいる、いしかわ「能美の松原」サポートクラブが、今年7月に全国森林病虫

獣害防除協会が主催する平成29年度森林病虫獣害防除活動優良事例コンクールにおいて協会会長賞を受賞しました。

同クラブの会長荒田正信さんと事務局長北村共二さんにお話を伺いました。

○活動の取り組みのきっかけはどのようなことでしたか
ご承知のとおり、地域の松林は私たちの先祖の努力により育てられ、日本海からの強い風や飛砂から地域を守ってきた大事

な森林です。

この地域の松林が平成15年頃から、松くい虫の甚大な被害を受けました。

この時、初代会長の菊田晴夫氏の呼びかけで、地域のライオンズクラブの会員と地域の住民が力を合わせて松林を守るべく、いしかわ「能美の松原」サポートクラブがたち上がりました。○どのような活動をされているのですか

私たちは、恒久的な松林の存続を願い、松林の保全に取り組む方々のサポートや、未来を担う青少年に松林を守ることへの理解を深める活動に取り組んでいます。

能美市立浜小学校では、松林の大切さを働きかけたところ、「はまなす緑の少年団」が結成され、小学生が松林保全活動に取り組んでいます。能美市立根上中学校では、校長先生や先生方にもご理解いただき、生徒会からなる「松々レンジャーズ」が結成され、年間5回位、松葉かきや除草活動などに取り組ん

でいただいています。

また、県農林総合研究センターの指導を得て、松葉から堆肥をつくるという資源循環型の取り組みにより、松林の有効活用を図っています。この堆肥は水稲をはじめ各種畑作物との相性がとてもよく、かつ雑草の発生も抑制され、有機農業のモデルにしたいと思っています。

ます。

平成27年に能美市で開催された「白砂青松再生の会 能美大会」でも、根上方式を報告し、全国から訪れた関係者にアピールしました。

○今後どのように取り組んでいこうとお考えですか

これまで、地域の松林を再生したいという一心で取り組んできましたが、現能美市長の井出敏朗さんや県からのサポートなど様々な方のご理解、ご協力によりここまで来ることができました。

私たちは、地元の小、中学校の子どもたちに松林保全の啓発に取り組んできましたが、やはり、これからもさらに多くの子どもたちにこの活動を理解し、体験してもらうことが重要と考えます。子どもの頃の経験は大人になっても忘れません。これからも青少年への松林保全を通じた環境教育をさらに広げるよう努力していきたいと考えています。
(南加賀農林総合事務所森林部)



右側奥から荒田会長、北村事務局長



地元浜小学校生徒による植樹体験

○根上方式の松林再生とはどのようなものですか

針葉樹を原料とした特製の木粉炭をクロマツの苗木の根に直接施用し植栽する方法で、活着率が非常に高く、実績がでてい

この人に聞く

千里浜海岸を守る地域住民によるクロマツ林再生活動について

千里浜地区まちづくり協議会 会長 越野 兵司さん



はじめに 千里浜海岸に沿って広がるクロマツ林は約300年前から植樹され、吹きつける潮風と飛砂から地区を守る役目を担ってきましたが、近年は、松くい虫被害等により減少し、防風・飛砂防備機能の低下が懸念されてきました。このような中、千里浜地区まちづくり協議会は、平成18年4月より地域住民による森づくり活動と森林環境教育の推進に取り組み、平成28年には、いしかわ森林環境功労者表彰、同年10月には全国育樹活動コンクールで「国土緑化推進機構理事長賞」を受賞し、功績が高く評価されています。

私の子供の頃、クロマツの落葉や枯枝は、肥料や火持ちが良かったため家庭用の燃料として利用

今回は、長年活動に取り組みされている同会会長の越野兵司さんにお話を伺いました。

クロマツ林への思い出について

取を手伝ったのを覚えています。そのため、林内はクロマツの好む肥料分の少ない環境が保たれていました。しかしながら戦後は、その利用が減り、徐々に落葉や枯枝が積み、やせ地を好むクロマツの生育環境が損なわれていきました。また、松くい虫を原因とする松枯れによって「青松」の林という美しい景観が消失していくことに胸を痛めていました。

これまで取り組まれてきた内容について

平成10年3月に高校の教員を退職したのを機に、クロマツ林の再生を願い、各種勉強会への参加や関係機関への働きかけを始めました。平成17年に羽咋市千里浜地域に居住する個人・団体を会員として、「住民相互が支えあい心豊かな町づくりを行う」とことを目的として「千里浜地区まちづくり協議会」が組織されました。また、同協議会では、平成18年4月からは、同協議会が活動の一環としてクロマツ林の保護と再生を目指す整備活動を始めています。私は当初



植樹活動

取り組みを行うなかで工夫されている点について

日曜日に活動することが多いので、地域住民の親睦も兼ねて、軽食も交えて行っています。また、植樹の際に、参加者が円滑に作業できるよう、事前に植穴掘り、竹支柱設置等の準備を行っています。

今後の抱負について

幸いこれまでに植栽したクロマツは順調に生育しており、今後も当地区まちづくり協議会は、クロマツ林再生活動を、植樹を中心に今後も継続していきたいと思っています。先人が長年にわたって守り続けてきた千里浜のクロマツ林を、将来、植樹を行った小学生が家庭を持ち、再び新年生と親子として参加するような息の長い活動として受け継いでいければと思います。

また、地域住民自らが森林整備を行う他の団体とも連携を取りながら、より取り組みを活性化させるとともに、自らの地域を活性化させる新たな仲間が他にも生まれることを期待しております。

活動を昨年4月7日に行いました。

この人に聞く

鞍掛山と共に歩む賑わいづくり

滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長

山下 豊さん

石川県の南部にある「鞍掛山」は、小松市と加賀市の境界にあります。ふもとから見ると山に鞍を掛けたような形をしていることから、鞍掛山と呼ばれています。この鞍掛山をフィールドに活動されている「滝ヶ原町鞍掛山を愛する会」の会長である山下豊さんに、お話を伺いました。



山下 豊さん
(バックは登頂した各地の鞍掛山の新聞記事)

○「滝ヶ原町鞍掛山を愛する会」(以下、愛する会)はどのような経緯で設立されたのですか。
鞍掛山への登山者の増加に伴い、登山道の整備や動植物の保護に対応するため、平成9年に設立しました。「安全・健康・環境」をスローガンに掲げており、会員は80名程度です。
○「愛する会」ではどのような活動を行っていますか。

主な活動としては、

①登山道周辺の整備として、草刈り・除伐・動植物を保護する環境づくりを行っています。このような活動の成果もあってか、年間1万人を超える登山者が訪れます。

②全国に21箇所ある同じ名称の「鞍掛山」を会員で登山しています。19年の歳月をかけて21山すべて制覇し、現在は2巡目に入り、各地の「鞍掛山」を守る人たちの繋がりができましました。

③登山口近くでビオトープ「トンボの楽園」を整備し、ハツチヨウトンボやホトケドジョウといった希少な動物を保護しています。小学生を対象に観察会をここで実施するなど、生息環境の大切さを伝える活動を行っています。

④ボランティアガイドを育成しています。鞍掛山の魅力や安全な登山方法を普及啓蒙するため、ボランティアガイドの養成講座を実施しています。

○「愛する会」を継続していく中で、苦勞していることはありますか。

会員の平均年齢が60歳と高齢化が進んでいます。登山道整備には体力が必要となり、人手が足りないこともあります。このため、後継者の育成を進めています。



滝ヶ原町から望む鞍掛山

○鞍掛山の魅力を教えてください。

3月以降、春の訪れを告げるマンサク、タムシバ、ミツバツツジ、ヒユウガミズキの花が咲きます。準絶滅危種のギフチヨウも見られます。6月にはササユリが咲き、7月にはナツツバキの白い花が咲きます。秋にはナツハゼの黒い実やナナカマドの赤い紅葉が見られます。このように四季を通じて美しい植物が見られ、貴重な動物も生息しています。

動植物を観察しながら登山し頂上にたどり着くと、360度見渡せる大パノラマが広がります。

頂上からは、白山や加賀平野、日本海、金沢の街まで眺めることができ、登頂の達成感と絶景を味わうことができますよ。
○登山者には、どのようなことに気をつけてほしいですか。
安全面やツキノワグマに気を付けて登山をして下さい。登山口には登山用のポストが設置してあるので、活用をお願いします。動植物は採取せずに撮影するだけにとどめ、五感で楽しんで下さいね。



鞍掛山登山口 (滝ヶ原町)

○これからの目標を教えてください。

鞍掛山を含む滝ヶ原周辺には様々な地域資源があります。これらの資源を生かし、スローツーリズム等により魅力を発信するとともに、交流人口の増加を図り、地域の賑わいづくりにつなげていきたいです。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

森林公園の魅力伝える森の案内人

石川県森林公園インフォメーションセンター長

内藤善太さん

本州でも有数の面積を誇る石川県森林公園（津幡町）は、開園以来多くの県民に利用されています。

ことになりました。
○どういった仕事をされていますか？

今回は公園内にあるインフォメーションセンター「わくわく森林ハウス」にて、センター長として、また公園のガイド役として活躍されている内藤善太さんに、お話を伺いました。

センター長として全体の統括のほか、森林公園の魅力を生かした自然体験や、石川県で唯一のプログラムなどを企画し、実行しています。

元々は金沢市の事務系職員として働いていましたが、子供の頃から自然に触れることが好きで、当時からいしかわ自然学校やNPO団体で実施する自然体験イベントなどの手伝いに、ボランティアとしてよく参加していました。

現在は年間約50回のプログラムやイベントを開催し、延べ千人ほどの方々にご利用をいただいているところです。季節に合わせた定期的なプログラムのほか、ツリークライミングやノル

○森林公園の魅力や今後の展望は？

また「わくわく森林ハウス」館内の展示等にも力を入れており、訪れた方が森林公園に興味を持ち、何度も足を運んでもらえるようにと考えながら企画しています。

また、公園内のウォーキングなどを通し、地域の方の健康づくりや交流の場として「わくわく森林ハウス」を利用してもらうなど、日常的に森林公園を訪れる機会が増えるような企画も考えていきたいです。

それらの活動を通じ、段々と自然と関わり、その魅力を多くの人に伝える仕事がしたいと思うようになり、そんな時にちょうど森林公園のインフォメーションセンター長の募集があり、縁あって平成25年4月より働く



親子で参加できる自然体験プログラムガイドとして公園の魅力を伝えます

この森林公園はありふれないゆる代表的な里山でありながら、豊かな森林の中で身近な生物の世界の面白さを知ることや、五感を通して森林の癒し効果を感じることができるなど、非常に魅力のある公園です。私自身、もう何年もここで働いていますが、いまだ興味が尽きず、日々新しい発見があります。



内藤善太さん

（県央農林総合事務所森林部）

この人に聞く

地域エネルギー資源の活用を目指して

「白山しらみね薪の会」理事兼事務局長 風 一さん



平成25年
3月3日に
白山市白峰
地区の住民

グループが中心となり、「環境保全と地域エネルギーの資源の持続可能な利用」を目指して、市原あかね金沢大学人間社会学域教授を会長とする「白山しらみね薪の会」が設立されました。今回は理事兼事務局長の風一さんにお話を伺いました。

「薪の会」設立の経緯を教えてください。

白峰地区では、平成19年からNPO法人白山しらみね自然学校を中心に、住民グループが地元企業や金沢大学と共に「白山自然エネルギー利用研究会」を立ち上げ、白山麓の地域資源を活用し、再生可能エネルギーの導入の事業化と山村地域の活性化を目指して研究調査活動を行ってきました。当地区は豪雪地帯のため、雪の重みから家屋

を守るための屋根雪おろしが必要ですが、とても危険な重労働です。近年は過疎・少子高齢化の影響で屋根雪融雪装置を設置する世帯が増えていますが、石油価格の高騰もあり燃料費が大きな負担となっています。東日本大震災以後、再生可能エネルギーが注目され、農業用ハウスの加温や薪ストーブの燃料として、薪を主とした木質バイオマスの利用が県下で増大しており、地域内においても薪ストーブの使用が増えています。一方、地域には間伐・更新伐施業地の残材や林業・作業道等の開設時に発生する支障木など、未利用の木質バイオマス資源があり、これを活用できればコスト的にも、そして、何より地域の環境保全にもなります。その第一歩として「薪の会」をスタートさせることにしました。

活動内容はどのようなものでしょう。

会員は薪ストーブ使用者やこれからの設置予定者を中心に白山市内外に約20名います。活動は薪の生産を主体に森林レクリエーションや環境教育といった場の提供と併せて体験型の交流活動として年間5回ほど実施していく予定です。薪の生産にあたっては、地元の林業事業者から間伐材を中心に仕入れ、会員や地域の住民だけでなく、地域外から森林ボランティア活動や学生インターンシップ事業などを通して協力者を募ります。生産した薪は屋外で乾燥し、希望者には宅配したいと考えています。また、薪の要望は多様なため、原木の種類や薪の長さなど細かいニーズに対応できるようにしていきたいと考えています。

販売は、ガソリンスタンドならぬ薪スタンドの設置を計画しており、薪を燃やしたあとの灰の回収も行って、農林業用肥料として利用したいと思っています。

今後の展望について聞かせて下さい。

かつて白峰には厳しい冬を乗り切るための高度な知恵や薪炭利用技術がありました。その伝承の機会はどんどんなくなってきています。持続可能な資源利用の知恵や炭焼き技術、自然と共生する生活文化を現代の生活に生かすことを実践していきたいと思います。金沢大学等の有識者の知見をいただきながら、いずれは木質バイオマス燃料（薪・炭）を利用した環境への負荷が小さい屋根雪融雪装置の実用化を目指し、エコな地域づくりで白峰を活性化させたいです。

ありがとうございました。

白峰で造園業を営む風さんは「薪の会」の他にも、白山麓でわさび栽培に取り組み、わさび漬やドレッシングなどの特産品販売にも力を入れています。地域振興に向けてさらなる活躍を期待しております。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

能登町「当目夢を語る会」の取り組み

当目夢を語る会 会長 向峠 智隆 さん



能登町当目は奥能登の中心部(旧柳田村)に位置し、猿鬼伝説や

平家の落人伝説が伝わる自然豊かな地域です。地域の活性化に住民有志が自ら取り組むグループ「当目夢を語る会」の会長向峠智隆さん、副会長谷口文夫さん、事務局の修田勝好さんにお話を伺いました。

○「当目夢を語る会」について

当会は平成24年11月に当目の住民全体(当時94世帯、245名)を会員として発足しました。旧柳田村にかつて7校あった小学校は現在1校になり、当目でもここ数年空き家が目立ってきました。このままだと「限界集落」になるという危機感から、今何か手を打たなければならぬと考えることなのです。

○会の活動は

当目は、昼夜の寒暖差が激しく、飲料水にもなる山からの冷たい水が豊富で、昔から美味しい米ができることです。そのため、まずはこの米を地域の特産品とする取り組みから始め

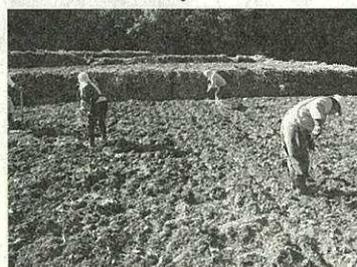
ました。先進地のブランド米と差別化を図るため、安心・安全なお米と地域の魅力をセットで販売することにしました。具体的には生活排水の入らない清流で栽培すること、年間100キロ以上の米を購入してくれたお客様を「特別住民」として、農業体験への招待や地域の特産品を定期発送する「特別住民制度」の導入です。

また、石川県立大学のサークル「援農隊めぐり」と提携し、ブランド化や情報発信、パッケージの作成など若者の視点を交えて取り組んでいます。今年度は特別栽培米や有機JASの取り組みも始め、顧客も増えています。

今年度からは能登半島地震復興基金の補助事業を活用し、耕



耕作放棄地



フキ栽培に活用

作放棄地を開墾しフキ栽培も始めました。地域のお年寄りや女性が無理なくやりがいを感じながら働ける場を作るためです。さらに、新の生産も試験的に始めています。若い人が定住するためには、農林業を上手く組み合わせ、収入が確保できることが不可欠です。このため、豊富な森林資源を活用できればと、地域の山から買い取ったナラ材を新に加工する取り組みをしています。使用していない新割り機を住民からレンタルし、廃校になった小学校の体育館を町から借り受け、そこで作業しています。これまでに14トンほどの材を購入して、新にするための1日1人あたりの生産性やコスト、収益性などを試算しています。今後はこれをもとに出来高

に応じて作業に応じた住民に賃金を支払う仕組みにしていく予定です。今年度はスタートの年でもあり、材は購入しましたが、来年度は自分たちで山から

材を伐り出して調達する計画をしています。

○今後の展望は

当会のメンバーは定年を迎えた60代が中心です。将来にわたる活動を継続していくためには、補助金や人的支援が受けられる今のうちに組織としての体力をつけ、自立できるように後継者を育成しなければなりません。自分たちが中心となって動けるここ数年が勝負だと思っています。

この取り組みを始めてみて感じたことは、一人ひとりそれぞれが得意分野や農林業の経験を持っており、貴重な人材が地域に豊富であるということです。また、学生さんが田植えや草刈りなどに参加してくれることで地区にもわかに活気が出てきました。作業場の土間張りも、住民からの出資と地元土建会社の支援を得て自力で行いました。機械や資金などまだまだ課題はありますが、多くの方の知恵を借りてより良い地域づくりを永く取り組んでいきたいと考えています。

ありがとうございました。地域の将来を見据え、強い思いで地域の活性化に取り組む「当目夢を語る会」の活動を事務局をあげて応援していきたいと思えます。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

小松市の基本構想は3活

小松市 環境共生部
担当部長兼農林水産課長
山本哲也 さん



昨年5月に開催された第66回全国植樹祭のメイン会場となった小松市の農林水産課にお話を伺いました。

小松市では「こまつフォレスト協議会」が立ち上がったとのことですが、その内容は…

全国植樹祭の開催を契機に、市民に高まった意識を健全な美しい森づくりにつなげることを目的とし、森林の有する多面的機能が十分に発揮されるよう「循環型森林保全」を目指しています。

産学官が一体となり環境と共

生するスマートな街と人を次世代へ残すための基本構想を策定すると共に新たな森林資源の活用策の検討を行います。

こまつフォレスト協議会のテーマは、①木活（木が活き）・②森活（森が活き）・③人活（人が活き）で、木を使い、森を守り、林業を支える人づくりをキヤッチフレーズにしています。

基本構想の策定を進める中でアンケートも行われたと聞きましたか？

森林所有者7,367名に対し、所有森林の面積や後継者の有無、今後の経営意向等の課題などの意見を頂き、構想策定の基礎資料として活用していく計画です。

特に今回のアンケートでは、宛先不明者が全体の12.9%もあったことに驚いています。過疎や高齢化の要因も重なり、市外へ転出された方の中には小松市に

森林があることすら知らない可能性もあるのでないかと懸念しています。

今後の小松市の林業の取組方針について教えてください。

小松市の豊かな森林資源の保全と利活用を目指し、林道開設や緩衝帯、市行造林等の森林資源を保全することはもとより、かが森林組合や各町林産組合との連携をより一層強化していくことが必要だと思っています。

また、「環境王国こまつ」として再生可能なエネルギー資源である木質バイオマスの活用等を通じて環境負荷の少ない新たな社会・まちづくりを目指すため、地域住民やSATOYAMA A協議会、水郷2020などの関係団体との関係を密にして森林・林業に携わることが市の農林行政の責務と考えています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

地域住民の感謝を励みにイノシシの捕獲活動を行う

浦 啓一さん



浦さんが捕獲したイノシシ

イノシシの捕獲名人と言われている輪島市在住の浦 啓一さんは、10年前まで輪島市役所に勤務され、在職中は農林水産、下水道、都市整備課長や建設部長を歴任されてきました。

浦さんがイノシシを捕獲するきっかけとなったのは、地元集落の水田約4.5haにイノシシ被害が発生し、自らの水田も被害に遭うなど被害が拡大してきたとこのことで、2年前に「わな」の狩猟免許を取得され、捕獲を始めることになったそうです。以前から狩猟の知識があった訳ではなく、特別な指導を受けた訳でもなく、狩猟免許を取ってから猟友会の人に何度か聞いたそうです。主に県のマニュアルで捕獲方法を学び、自分で考え

て実践しているだけだそうです。捕獲作業は、基本1人で行っており、檻の運搬など人手が必要なときは友人に手伝いをお願いするそうです。

現在、5基の檻を設置管理しておられ、これまで約100頭のイノシシを捕獲されたそうですが、あと2基設置できれば自分の廻っているエリアを効率的にカバーできるとのことです。約2年間での、数々の捕獲を振り返って頂くと、1度にイノシシを6頭を捕獲したのが最高で、3、4頭は何度もあるそうです。時には朝、餌をセットし昼には数頭が入っていた事もあったそうです。比較的夜に活動するとのことですが、昼でも行動しているそうで、電気柵を終日通電していなければ効果がないとのこと。

浦さんに、沢山捕獲する秘策を聞くと、「特別なことは何もやっていない。ただ、マニュアルに書かれているとおりにやっているだけ」とのこと。「餌に特徴があるのですか」とたずねたところ、餌は米糠で一切混ぜ物はなく、1度芋を混ぜてみたところ全く食べずに残っていたそうです。他者では、米糠に酒粕や芳香剤を混ぜる人がいると言っていました。

イノシシ捕獲の思いは、「地域の人から感謝の言葉を言われた時が一番うれしく、ガンバロ〜とやりがいを感じる」と話していました。

最後に「捕獲檻を設置したら、毎日の見回りを欠かさず、檻周辺の足跡やエサの食跡などの変化を確認することが大事」とアドバイスを頂きました。

地域の住民は、捕獲名人の浦さんがいてくれて安心ですね。

浦さんには、これからも怪我等のないよう健康で、地域のためにイノシシ捕獲に頑張ってくださいと思います。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

山芋掘り35年のベテラン！

能登町（旧柳田村） 大井 茂（59歳）さん



里山には、た快感がやみつきになり、それを楽しみの季節が2回あると思います。「春は成長」で「秋は収穫」です。秋の味覚の代表には松茸もありますが、山芋（自然薯）を忘れてはいけません、今回は山芋を掘る名人の方を訪ねて話を聞かせていただきました。

○きっかけ

能登町（旧柳田村）在住の大井茂さん（59歳）です。以前は、町役場や春蘭の里の事務局に勤め現在は、能登町の集落支援員として活躍しています。

大井さんが山芋掘りを始めたのは、25歳の時に、山芋掘りの名人であった師匠の叔父が体力がありそうなので芋掘りに向いているのではと誘われたことがきっかけで、教えられるがままに山芋を折らずに掘りあげられ

雨であるうが、師匠から山芋種類・マイモ、ハイモの見つけ方や掘り方を学び、1日一人あたり10本〜15本、2人で年間100kg以上を掘りました。これまでの最高は、1本約3kgで長さ1.5mほどあったそうで、品評会では何度も賞を取ったそうです。

掘り始めて15年間くらいは、師匠と競争するように掘っていましたが、師匠が引退した後は一人で山に入り、持ち前の体力と根気で現在も掘り続けています。

○こだわりの道具と収穫

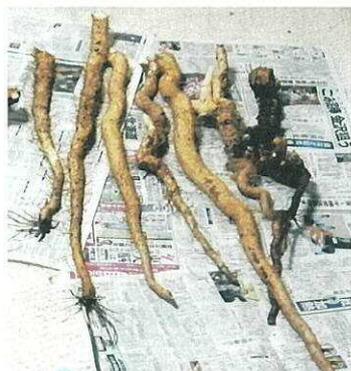
山芋掘りと収穫場所へのこだわりは、他の人は色々の道具を持って行くそうですが、大井さんは、普通のスコップをグラブナイダーで刃先を木の根などを切るようにしたものを1丁だけ持って行くそうです。このスコ

ップの良いところは、掘り始めの木の根が多い部分や軟岩程度は容易に切れるとの事で大変重宝しているそうです。掘り幅は40〜60cmで縦に深く掘り終わったら必ず埋め戻しをすることが山芋掘り者の最大のマナーであると話しています。

山芋掘りの場所は、自宅周辺の山に10力所くらい見つけてあり、資源の確保のために1シーズンに2力程度の掘り取りで、年毎に順番に使っているそうです。

○山芋の食べ方

掘りとった山芋のほとんどは贈答用に用い、それ以外は友人



収穫された山芋（自然薯）

との会食等に使っそうであります。ここでおいしい食べ方について教えていただきました。すりおろした生のトコロも美味しいですが、この時期は狩猟解禁と重なり、キジやヤマドリの出汁にすりおろした山芋を浮かして食べる料理が一番美味しく、4〜5人で一度に5kgがなくなるほど高評で大井家の年中行事となっているそうです。

○今後について

能登町には、山芋掘り名人は他にも8人程度いるそうですが、ここ3ケ年はイノシシ被害が増えていることや高齢のため、掘るのを諦めたと言っている方もいます。これからも山芋を収穫しつづけ、おいしく味わっていただくには後継者を育成することに加えて、イノシシの対策が重要であると考えています。まだまだ現役で頑張りたいと思います。（奥能登農林総合事務所森林部）

この人に聞く

キノコ採り名人

能登町中斉 笹谷内 秀雄 さん



奥能登は

沢山の野生

キノコが自

生している

自然豊かな

土地であり、

昔から秋に

なるとキノ

コ狩りが盛んに行われています。

今回は地元でキノコ採り名人と

言われている能登町中斉の笹谷

内さんにお話を伺いました。

○商売の傍り

笹谷内さんの職業は畳屋さん

で、20才のころから父親に畳作

りを教わる傍ら、秋になると山

へ入るのが趣味でした。キノコ

の知識も自分で図鑑を見ながら

覚えたそうです。今までにはい

ろいろな毒キノコも誤って食べ

てしまった経験があるようで、

ツキヨタケを間違えて食べたと

きはかなり大変だったそうです。

そのおかげで絶対にツキヨタケ

を間違えることが無いとのこと、

ちなみに食感はいタケのよう

な噛み応えがあり表面は少しぬ

めり気があり美味しかったそう

です。

○直売所を始める

山梨県に畳を持って行った帰

りの富士吉田と甲府にまたがる

御坂峠付近にキノコを売ってい

る店があり、繁盛していきまし

た。キノコを売って商売になる

のなら、能登でもキノコが沢山

取れるので地元貢献を兼ねて、

商売になるのではないかと思い

販売店を始めました。店を始め

ると近くの人が山から採ってき

たキノコを持ち寄るようになり、

そのキノコを買い上げて販売し

ました。キノコは生物なので何

日も置いたものは販売できない

し、この店に来たら、どんなキ

ノコでも有るをモットーに頑張

っています。

○キノコの発生

キノコは、山の上の方ではマ

ツタケ、コノミタケ等が多く採

れ、中腹にはシメジ、ズベリ(ア

ブラシメジ類)等が多く取れ、

くぼ地にはよくジコウ(コウタ

ケ)が取れます。大体採れる個

所は毎年そんなに変わったりし

ませんが、ジコウは少しずつ山



収穫した野生キノコ



直販所「むうぶめんとファーム」

きていた
ので、自
分たちで
何とかで
きないか
と炭焼き
グループ
も結成し
た。また
来年から
は田んぼ
の耕作も
7haに拡

の尾根の方に移動していき山の

尾根に採れると次の年からは採

れなくなるそうです。発生時期

はクツタケ(ウスミラサキホウ

キタケ)が一番早く8月終わり

から9月中旬で、その後ズベリ

が出てきて、コノミタケは9月

終わりから10月中旬だそうです。

同じ野生キノコでも少しずつ時

期がずれています。

○ムーブメント(活動)

昔はキノコが採れたと良く言

いますが、今の3倍は採れてい

たと思う。炭や薪を作らなくな

り、木を伐採しない山が増えて

大して農山村繁栄の流れに一躍
を投じたいと考えている。キノ
コと米を中心に販売店とする
「むうぶめんとファーム」は旧
柳田村中斉の珠洲道路沿いに店
を構えていて、「73才になる自
分にはあと何年出来るかわから
ない」と言われていましたが、
表情にはまだまだ自信があるよ
うに見えました。

読者の皆様、今年のキノコシ
ーズンにはぜひ立ち寄ってみて
はいかがでしょう。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

ミツバチと共に50年

石川県養蜂組合 相談役 下橋 芳夫 (83歳) さん (金沢市)

石川県養蜂組合の相談役として現役で養蜂を行っている下橋さんに、養蜂にかける想いを伺ってきました。

いつから養蜂を始めたのですか。

30代前半から始めたので、約50年になります。趣味で始めたのですが、70歳で営んでいた建築業を引退してからは本格的に取り組んできました。

養蜂の一年間のサイクルを教えてください。

石川県では、例年3月中旬ごろから巣箱を温めて餌(砂糖水)を与えはじめます。4月下旬には新しい女王蜂を育てるための作業(移虫)が始まり、5月中旬には新女王が誕生します。また、この頃から働き蜂の数もピークに近づき採蜜も本格化して、一年で一番忙しい時期を迎えます。その後は8月まで採蜜と花粉交配のためのミツバチの貸し出しを行い、9月に入ると越冬に向けた準備が始まります。どのくらいの数のミツバチを飼っているのですか。

今は4人で一緒に作業してお

り、ピーク時には70群(女王蜂1匹の巣が1群)、約280万匹飼っています。県内ではこれでも多い方ですが、昔はもっと飼っている方もいました。



越冬に必要な蜜が入った蜂の巣

いつ頃、何の花の蜜が採れるのですか。

春先の4〜5月にかけて、百花蜜ひゃっかみつといってフジやタニウツギ、ウワミズザクラなどの複数の花のはちみつが採れます。石川県の百花蜜は他県のもの比べて味や香りに癖がなく、質が高いと言われています。

5月下旬〜6月にかけてはニセアカシアの蜜が、その後は7

月にクマノミズキ、8月にカラスザンショウの蜜が採れます。ニセアカシアの蜜は水分が少なく、質が高く、クマノミズキはケーキ屋などで好評です。カラスザンショウは水分が多いので扱いが難しいですが、ミツバチの越冬には欠かせません。

昔と今で養蜂を取り巻く環境はどのように変わってきましたか。

私が始めた頃は、普通に育てていればミツバチの数も増える飼いやすい状況にありましたが、今は天敵の増加や農薬の影響、花の減少などもあり昔と比べて飼いにくくなりました。

そのため、金沢市の湯涌・医王山地域でも昔は10軒ほど養蜂家がいきましたが、今では僅かとなっています。

養蜂を長く続けていくポイントは何ですか。

一つは、元気な女王蜂を育てることです。女王蜂は寿命が3〜5年と長く、働き蜂を生み続ける役割があるからです。

もう一つは働き蜂が楽に蜜を採れる環境を整えることです。

そのため、女王蜂の巣別れをスムーズに行う巣箱や、天敵であるスズメバチの捕獲装置を自作するなど、様々な試行をしてきました。



スズメバチ捕獲装置がついた巣箱

あとがき

ミツバチの生態を熟知し、富山県からも養蜂の講師として招かれている下橋さん。様々な道具を建築業の技術を生かして自作しています。観察から生まれたアイデアを形にし、より良い方法を探り続ける探究心こそ、養蜂にかける活力の原点であると感じました。

(県央農林総合事務所森林部)